

# 古史傳

自第三十三段  
至第三十九段

## 八

和書門			
四二五九號	一三二號	一三二號	二七冊
函	架	冊	類

內閣文庫			
四二五九號	一三二號	一三二號	二七冊
函	架	冊	類

內閣文庫	
番號	和 94
冊數	27 ( 8 )
函號	140 184



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak







三十三

古史傳八出案

九口

神代古史

平廣國體撰

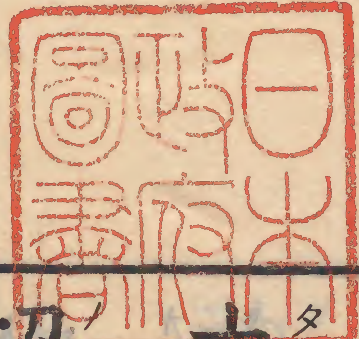
明 禮胤



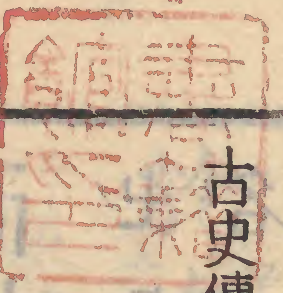
故於是各中置天安河而相對  
立而宇氣布出時天照大御神  
詔曰若海不右異心則其所生

古史傳





三十三



古史傳八出卷

カニヨノカミツキヤキトイフキ  
神代上八出卷

和九四  
號

平篤胤謹撰

町田久成獻納之章

男 鐵胤

孫 延胤

淺草天文庫



故於<sup>カレ</sup>是<sup>コ</sup>。各<sup>ニ</sup>中<sup>オノ</sup>置<sup>モク</sup>天<sup>ナ</sup>安<sup>カニ</sup>河<sup>オキ</sup>而<sup>アメ</sup>。相<sup>メ</sup>對<sup>ノ</sup>。

立<sup>タ</sup>而<sup>シ</sup>。宇<sup>ウ</sup>氣<sup>ケ</sup>布<sup>フ</sup>出<sup>ト</sup>時<sup>キ</sup>。天<sup>アマ</sup>照<sup>テ</sup>大<sup>ラス</sup>御<sup>ス</sup>神<sup>オホ</sup>。

詔<sup>ノ</sup>曰<sup>リ</sup>。若<sup>タ</sup>汝<sup>ハク</sup>不<sup>モ</sup>有<sup>シ</sup>異<sup>イ</sup>心<sup>マシ</sup>。則<sup>ズ</sup>其<sup>アラ</sup>所<sup>ケ</sup>生<sup>レ</sup>。

古史傳八



出子。必當男子焉。言訖而天照

大御神。先乞度速須佐出男命

出御。佩出十拳劔而打折三段

而於天出真名井亦云天淳名

出真振滌而佐賀美爾迦美而

於吹棄氣噴出狹霧成坐神出

名多紀理毘賣命次狹依毘賣

命次多岐都比賣命凡三柱女

神生坐矣

各は師云宇氣布之時へ係て心得ばし。ぬぐひふせ云む  
が如し。源氏物語若菜上みおのくはまゝおく契。○天



安河は。天都日の御国ヨに在る川を流る。上第十五段注に。師云。近江国ヤスカも安河と云ふ。天武紀天武紀に見ゆ。其を天上天出て別ある。此時天武紀に成坐る神名の日コ子根も。彼国天の地名郡名有る。今云。近江国ヤスカに日子根コと安河コと。○中置ナカマキを。云地チのハ有る由ユに下シ注ツを見べし。中間ナカマに隔ヘたるカ也。万葉マンヤフ十一ナの紅ベニの欄カ引ヒく道ミチを中置ナカマキて云くととコ也。ちて此川を中置ナカマキて誓ウケヒ給ふとと。須佐之男命スサノヲノミコノミコトの御心ミコトココロに眞偽マコトイセリの知らま給ハ怒故イカリに親ミび給はば。御心ミコトココロをおきて。川カハに向ムカふ遠放トホソケ給へるハらむ。又岩屋戸段イハヤドノタビ御言向ミコトコト段タビおぞ。凡て重オモシ死御議シノミカの時トキに八百万ヤチマンマン神カミを集ツ給ふと。いおも此河原カハあるを思ふオモふ。御誓ミコトウケヒの事コトを重オモシみ給ふ依ヨて。まコと此川カハハ。

大御神オホミカミに大宮地オホミヤヂに前マヘに流る。川カハを流る。其邊ミナトに坐イて待向マツムカひまし。須佐之男命スサノヲノミコノミコトを国土クニツチをゆユ參上マカヒに給ふタれま。たのぢチらふ。かく川カハを隔ヘて對立オウリツあるハふも有アべし。何れナニも此川カハを火神ヒノカミの血チに激ツ上ノボして化ナれる。五百箇イハハ磐イハ群ムラの在アる所トコロをマば。由ユ何ナニの事コトと思オモはるハを。猶ナ深コく考カへべきコト也。此コノ師シの神代カミヨの天上アマノの故事コトワザを云イふ。皆みな此河名カハナを云イふ。他タ流ナのイく筋スジも有アて大オホなる河カハを云イふ。○宇氣布ウケフ之時トキに宇氣布ウケフは。宇氣比ウケヒの活用ハタラク語コトバ也。○乞度コヒタハ。師シ云イふ。乞取コヒタと云イふが如ごとし。即すなはち書紀フキキにソとク索取ソクツ度タビと云イふ。今イマに人ヒトに與ヤるハをシみ云イふと。古コハ此方コノカタへ取ツをシ云イふハあり。○三段サンダン也。上ウヘ第十ジウ五段ゴダン斬キ迦カ具ク土ツチ。



神而爲二段とある處に注す。けして三段に斬給する故に。  
三柱神生坐るを依べし。此も彼段に例あり○天之眞名井。天、淳名井。  
井去來之眞名井。師説ふ。天、眞名井と云名義を。天、淳名井  
ともあるを合せて思ふ。眞、淳名井の約する名ふて。那奴  
を切りて眞を美稱。眞水を云ふと云ふ説。淳ハ凡て水の  
那とある。眞を美稱。例のいとるさし。淳ハ凡て水の  
湛とる所を云。沼も同じ。名を借字ふて之を云。之を那と云。然  
まむ此を井を美て云ふ。稱よて。一の井れ名ふを非也。故  
書紀よは。掘、天真名井三處とも有ぞりし。はと此井ハ安  
河瀬に中ふて井と云はき所を指て云ふ。て。別よ尋常  
ふ云ふ井ありし。ふを非也。書紀よ。此井を云ふ傳ふを河  
を云ふ。河を云る傳よハ此井

を云ざるも。始、中置天安河と云おきて。今此お如此言  
此故もや。別、お非ること明らし。凡て古を泉ふまれ川ふまれ。用  
る水よ汲處を井と云ふ。とあり。けして此師説を。天之眞名  
井の本義を依を。猶、一の井を指て云ふ。おとも有也。其考  
ハ下第四百四十三段天、お注べし。○佐賀美爾迦美而。此を  
書紀よ。齧然咀嚼と書て。注ふ。此云。佐我彌爾加武とあり。  
師云。玉篇ふ。齧、齧、堅聲と注せ也。か、ま、心感齧を約て。佐  
賀美とは云あり。志加を切ま。佐、堅物を齧免む。口の蹙  
む謂あり。○吹棄氣噴之狹霧ハ。布伎宇都流伊夫伎乃佐  
岐理と訓はし。即書紀よ。然。棄を宇都流と言ふ例は。八千



示神の御歌不見也。氣噴ハ氣吹と書るも同じく。息吹  
 あり。伊とのみ云。狹霧のあと。上第十注。けて息を  
 霧と云る例を。万葉五。大野山霧立。とる我が形げく。  
 於伎蘇の風。霧立わとる。於伎息あり十五。君がむく海邊  
 此宿。霧立ば。あぐ立れ。ぐく息と知。はせ。ま。と猪鹿。あ  
 霧。小似。とりと云る。こと。景行天皇。卷。雄略天皇。の息をも。  
 卷。猪鹿。多有云。呼吸。氣息。似。朝霧。あり。○多紀理  
 毘賣命。御名。義。下の多岐都比賣命の處。注。○狹依毘  
 賣命。御名。義。狹ハ例。此眞。通。佐。依。余呂斯の約。正。と  
 る言。ふて。眞宜。しの意。此稱。名。あり。○多岐都比賣命。師云。  
 多岐都。多紀理。毘賣命の多紀理と同く。河の早瀬の状

を云言。あれバ。二柱とも。ふ。安河。ふ依れる御名。ふや。けて  
 多紀理と。多岐都。や。全意も言。も同きを。二柱の御名と  
 せむ。て。い。か。と云。疑。も有。ぬ。べ。け。ま。ど。次。此。五男神の  
 御名。此。例。も。皆。然。ふ。き。疑。ふ。は。ら。ん。ま。多岐理の伎  
 濁る。例。あ。ま。バ。岐。字。を。書。ば。き。よ。清音の紀。字。を。書。き。ま。と  
 田。心。毘賣。と。も。あ。る。れ。と。を。合。せ。て。思。ふ。よ。別。意。あ。り。げ。よ  
 も。聞。ゆ。れ。ど。猶。上。よ。云。る。意。あ。る。べ。し。さ。て。此。三。神。の。御。名  
 を。心。の。動。靜。を。以。て。説。る。れ。ど。を。更。よ。由。あ。し。田。心。と。書。る  
 文字。と。正。思。寄。れ。る。ふ。や。何。あ。る。を。け。し。

於。是。速。須。佐。出。男。命。乞。度。天。照



大御神所纏左御美豆良八尺  
カホ三カ三ノマカセルヒタリノ三三  
 勾璉出五百津出御統出珠而  
マガタマノイホツノ三スマルノタマヲテ  
 瓊響瑤瑤然於天出眞名井振  
ヌナトモモユラニニアメノマナナフリ  
 滌而佐賀美爾迦美而於吹棄  
スギテサガニニカニテニフキウツル  
 氣噴出挾霧男御子生坐矣於  
イブキノササキリヒコニコアレマシキコハ

是速須佐出男命興言而曰正  
ニハヤスサノヲノ三コトコトアゲレテノリタヒマサ  
 哉吾勝矣因其御子出御名謂  
カアカツトキカレソノ三コノ三ナヲマラス  
 正哉吾勝勝速日天出忍穗耳  
マサカアカツカチハヤビアメノカレホ三ノ  
 命次乞度所纏右御美豆良御  
三コトツギニコヒワタシマカセルミギリノ三ミツラニ三  
 統出珠而佐賀美爾迦美而於  
スマルノタマヲテサガニニカニテニ



吹棄氣噴出狹霧成坐神出名。フキウツルイブキノサギリナリマセルカミノ三十八

天出穗日命次乞度所纏御鬘。アマノホヒノミコトツギニコヒワタシマカセルミカツラニ

御統出珠而佐賀美爾迦美而。ミスマルノタマラテサガミニカミテ

於吹棄氣吹出狹霧成坐神出。ニフキウツルイブキノサギリナリマセルカミノ

名天津日子根命次乞度所纏。ミナハアマツヒコネノミコトツギニコヒワタシマカセル

左御手御統出珠而佐賀美爾。ヒダリノミテニスマルノタマラテサガミニ

迦美而於吹棄氣噴出狹霧成。カミテニフキウツルイブキノサギリナリ

坐神出名活津日子根命次乞。マセルカミノ三十八イクツヒコネノミコトツギニコヒ

度所纏右御手御統出珠而佐。ワタシマカセルミキリノミテニスマルノタマラテサ

賀美爾迦美而於吹棄氣噴出。ガミニカミテニフキウツルイブキノ



サ  
ギリナリマセルカ三ノ 三十八クマヌ ク ス ビノ  
狹霧成坐神出名熊野久須毘

命。亦云熊野忍隅命。亦云熊野  
大隅命。亦云熊野忍踏命。

凡五柱男神生坐矣。

瓊響瑤々然奴那登母く由良爾と訓べし。即紀自然訓注  
を正仮字 奴那登ハ。奴乃於登の。乃於約して乃とあまる  
書あり。の。那と轉れるあ。瑤々然此意を。上 第二十 小云。但し  
彼をわざや也。飛くし給ふあるを。此を振滌として。也ら

くし給ふれ。○興言。古事記よ。師云。万葉六千。萬乃  
軍奈利友言舉不爲取而可來男常曾念七。八信井上。不  
事上不爲友十三。小蜻島倭之因者神柄跡。言舉不爲因。雖  
然吾者事上爲云。又葦原水穗因者神在隨事舉不爲因。  
雖然辭舉敘吾爲十八。小可久之安良波許登安氣世受。杼  
母登思波佐可延牟。あど見え。書紀ふ。興言。私記。小古。揚  
言あど書れ。稱之。れ。を。も。あ。り。訓。也。さ。て。許。登。を。言。り。又  
事の意あても有げし。阿宜。を。論。あ。ど。の。阿。宜。あ。て。事。の。さ  
る。あ。る。ば。き。ち。ま。を。云。と。舉。て。言。立。る。を。言。舉。と。云。あ。て。  
○正哉吾勝ハ。麻佐加阿加都。訓べし。其。え。あ。の。生。坐。る  
御。子。此。御。名。を。志。



る稱せ即字の如く正哉死哉吾勝とめと言ふあり。ちて  
ぞあり。即字の如く正哉死哉吾勝とめと言ふあり。ちて  
かく言ふとむは始ふ大御神の汝不有異心則其所生之  
子必當男子と認定給する御言此まふ。男子の生坐  
て其赤き御心此現をれとまバあ。正哉吾勝勝速日  
天之忍穗耳命御名義師説ふ。正哉吾勝。須佐之男命の  
御言舉ふ依れる御名あ。今云文子因其御子の勝速日  
は加知波夜備と訓べし。古より加都乃波夜比と訓るハ  
ぬも下文ふ。於勝佐備云くとあると同意よ。佐備のこ  
委く云を速ハ疾く烈く猛き意日ハ夫流とも活きて其  
合せ見と。速日は即知波夜夫流此波夜夫流と同意  
状云辭ふて。速日は即知波夜夫流此波夜夫流と同意

あ。上の獲速日。燖速日。ま。饒速日。あ。と皆同じ。日字は  
ふ説あど。例此古忍穗耳ハ。大耳。美稱あ。忍の  
言を知ぬ強言あり。忍穗耳ハ。大耳。美稱あ。忍の  
大あるあ。上此忍許呂別の所。第八云。穗も大あ  
。大此意を省死。富と此み云る例多し。中ふも書紀ふ。  
三穗之碕とある地名を古事記。御大之前と書るあ。と。  
此よとく合。逆。藝命。御次。三御代の大御名  
として。此御名も字の如く。稻穗とせむ。ちることあ  
れども。彼三御代の御名を天降坐て。後此水穗。圍を所知  
看せる。此土。不。降。坐。さ。ま。御趣。異。あり。の。奇。庭。之。穗  
の。詔。命。も。逆。く。藝。命。は。耳。は。尊。稱。れ。耳。字。ハ。も。と。神。武。天  
係れるをも思へ。耳は尊稱れ。耳字ハもと神武天  
皇の御子とちふ。其耳と申は多く。其外の人名も多し



依。皆同じおせあり。お不言ち。亦名を天之大耳。ちて耳  
てふ尊稱の意を。美ハ比ヒに通ひて。かの産靈おど此靈お  
るを。靈くと重祓とるものあり。開化天皇此大御名。大毘  
毘命を申は是あり。まゝ應神卷れる。前津見てふ人名を。  
前津耳とも有を以て。耳と云を。美を二重祓とるふて。見  
と云を。其を一。畧けるものある事。我知法し。と何也。お不  
し説ども何也。記傳よ就て見べし。此ふて此大御名の稱。言此義ハ聞えと  
るを。猶考るふ。正哉と云を也。勝速日までハ。須佐之男。命  
の御誓よ勝ふるひて。荒進アラシムひ給するふ依て。負坐る御名  
ある字。やぐて忍穗耳。命の御名よ負坐るお也。其を書紀

一書ふ。勝速日命。兒天。大耳尊と云。有を思ふべし。勝速日命  
と云。即須佐之男。命お坐し。大耳尊と云。やぐて忍穗耳。命  
のおとある字也。然るを師の勝速日。等兒と訓て。等兒と  
ハ非交云く。と云れしハ。ふとして思誤られしものあり  
也。熟事實を考へ。ことして辨ふべし。まゝ火之戸幡姫。兒千  
千姫。命萬幡姫。兒玉依姫。命おどある姫兒をも。比賣基と  
訓て。一神ある由よ云れしも違へり。其を下お辨へてむ  
けて天之忍穗と申は言義ハ。師説の如くよして。かく負  
坐るおせは。天之眞名井お依まら御稱ある法し。其を伊  
勢外宮ふ。天忍穗井と云ふ御井有て。亦名を天之眞名井  
と云を。此御井の原を。天忍雲根。命の天上ある眞名井の  
水を取降らしして。天神此御教のまふ。日向ヒナ固ツ術出



とまろるあるを。後小丹波、因與謝郡比沼地、小移し。ま  
後小伊勢、外宮、小移せるあり。忍穂井と云名を。もと天  
上ある眞名井を云名、れり。此土、小ても言るあり。故  
を明けし。故此御名を。天之眞名井は依れるあらむと。  
推量らば、あり。れ、此御井のおと、小就てハ、いと妙あ  
る事のみ多るを。其を第四百四十三段  
よ注。○是、れり下。何れも八尺勾穂之云。瓊響瑤々然云  
云。おと云語あり。上、小讓て文を畧るあり。○天之穂  
日、命。師云。此も本右の穂耳と同言ふて。穂を大あり。日ハ  
美と通ひて。それ美を右、小云る耳の畧あり。けり。志、穂  
日も。穂耳と同くは。吾勝、命と。御兄弟御名の同きハ如何

と云ふ。上の三女神の中、多紀理と多岐都も同意言あ  
る如く。ま、次、此熊野久須毘命を。忍踏、命と毛申は。忍  
穂耳を正しく。同言ある例あり。か、れ、御兄弟、ちの  
御名も。多、少、けり。終を以て。分、奉、しものごとあり。  
けり。出雲風土記。天乃夫比、命と。神名式。山城、因宇  
る。此、命、よて。夫ハ穂の訛まるあり。神名式。山城、因宇  
治郡。天穂日、命、神社。清和天皇紀。貞觀四年。六月。山城、因正  
六位上。天穂日、命、神預官社。同十八日乙卯。授山城、因天穂  
日、命、神。從五位下。と見え多。因幡、因高草郡。天穂日、命、神  
社。清和天皇紀。貞觀九年。五月。以、因幡、因正三位。天穂日、命、  
神、列於官社と見也。出雲、因能義郡。天穂日、命、神社。仁壽元



年九月授從五位下文德實錄。天安元年六月。在出雲國。從  
 五位下天穗日命神預官社。と見也。まゝ近江國蒲生郡馬  
 見岡神社二座。とあるも。此神也。そは御子天夷鳥命あり  
 とぞ。此御社也。今日野大宮と云て。大社ありとぞ。天慶八  
 年。此御社也。貫之の書に。梁簡ありて。其文に。大嵩社者。天  
 穗日命神世之古趾也。於是欽明天皇御宇六年。現以創  
 祠。錦嶽其後。天武天皇白鳳甲申。仰德更作。時於彼谷而奠  
 儀。竟備矣。雖然。赤鳥早翔。今春。雨点。其瑤。玄兔。速過。今秋。露  
 疵。其瑤。清宮。既廢矣。故。今復。上棟。立柱。以全。其佳。躅。因。以祝  
 冀。明謨。朗融。四裔。定焉。良弼。協和。八荒。安焉。四時。序矣。敬。白  
 除焉。十雨。順節。穀梁。登焉。俯念。神明。叡聖。尚垂。皇愍。矣。敬。白  
 天慶八年己巳八月二日。從四位下。行木工。權頭。紀朝臣。貫  
 之。謹誌。神主。正六位上。出雲。宿禰。貞主。工匠。無位。鞍部。稻足  
 とあり。或云。右銘。中。錦嶽。とある。と。綿。面。山。と。も。綿。向。嶽。足  
 とあり。云。ひ。或。右。奇。日。中。錦。嶽。と。山。と。も。綿。面。山。と。も。綿。向。嶽。足  
 とあり。云。ひ。或。右。奇。日。中。錦。嶽。と。山。と。も。綿。面。山。と。も。綿。向。嶽。足  
 祭神三座。天穗日命。天夷鳥命。二座。を式内あり。名あり。武三熊。大

人命一座を式外あり。今の社地を馬見が丘と云て。牧を  
 檢する処あり。故に。今。云。り。け。て。貫。之。主。を。謂。也。る。地。  
 下あり。し。り。者。部。類。小。天。慶。八。年。三。月。廿。八。日。木。工。頭。上。八。古  
 書。み。見。也。作。者。部。類。小。天。慶。八。年。三。月。廿。八。日。木。工。頭。上。八。古  
 れ。こ。そ。扱。今。の。神。主。先。祖。ハ。小。舍。人。紀。重。方。と。云。進。ら。れ。と。る。  
 此。処。所。流。落。して。神。主。先。祖。ハ。小。舍。人。紀。重。方。と。云。進。ら。れ。と。る。  
 絶。の。後。祿。宜。を。權。神。主。と。成。し。由。舊。記。小。大。神。主。出。雲。氏。断  
 し。が。後。祿。宜。を。權。神。主。と。成。し。由。舊。記。小。大。神。主。出。雲。氏。断  
 二。親。此。追。福。の。為。に。建。つ。今。現。み。菅。谷。と。云。此。處。に。彼。重。方。の  
 け。て。毎。年。九。月。十。八。日。建。つ。今。現。み。菅。谷。と。云。此。處。に。彼。重。方。の  
 年。東。九。村。西。九。村。八。日。小。鎌。火。祭。と。云。何。り。此。原。を。元。和。五  
 公。儀。を。綿。向。神。社。の。社。前。に。取。り。て。鎌。火。を。取。り。免。分。ぐ。と。く。  
 公。儀。を。綿。向。神。社。の。社。前。に。取。り。て。鎌。火。を。取。り。免。分。ぐ。と。く。  
 東。は。音。羽。村。喜。助。西。を。益。田。村。角。兵。衛。と。云。者。あり。斧。を。定。め。  
 赤。免。て。火。花。ち。り。出。る。斧。を。喜。助。を。掌。み。の。せ。て。數。間。を。歩。  
 み。て。難。お。く。神。前。に。上。り。次。に。角。兵。衛。も。焼。斧。を。手。を。捕。  
 せ。少。し。歩。み。し。は。お。依。て。西。方。非。分。と。あ。る。二。人。共。し。を。捕。  
 孫。何。り。喜。助。が。家。を。り。毎。年。此。社。に。献。物。して。是。を。鎌。火。祭。

○古史傳八

○十二



と云ふ。此鍊火を握れる時、公儀を角田主馬、小川吉左衛門、兩人御檢使して、時の老中よび、各々出役ありしと、此社の事を記せる。綿向。○天津日子根命、名義と神社名跡記と云ふ見えとゆ。○天津日子根命、名義とあゆみとれし。根を尊稱。上の處。○天津日子根命、名義と桑名郡、多度神社は、此神ありとぞ。延暦元年十月、敘從五位下。天長十年奉授多度大神正五位下。承和六年十二月、奉授多度大神正五位上。同十一年六月、奉授多度神從四位下。嘉祥三年九月、詔以伊勢、固多度大神、列於官社。貞觀元年正月、伊勢、固從三位多度神正三位。同二月十七日、正三位多度神從二位。同月十九日、遣右中弁大枝朝臣音人向伊勢、固多度神社奉授位記賤寶云々。同五年六月、正二

位。あど、固史、小見也。今多度村と云ふ在て、多度山を桑名、み多度川の滝をかしこみ昔より宮あり、乾よ、あさる。万葉の上よ、さて、統紀七、み當藝郡多度山、美泉とあり、され、古を美濃、固子属、依子や、ま、山を美濃、伊勢、ふ、こ、ゆ、て、神社は伊勢、不属、る、や、と、帳考、よ、云、り、あ、不、此、御、社、の、事、ハ、下、み、天、麻、比、止、都、祢、命、の、処、よ、云、を、合、せ、考、へ、し。○活津日子根命、師云、凡て上代、神、ま、と、人、名、小、も、は、と、然、ら、て、も、活、と、云、言、多、く、見、也、地、名、小、生、固、あ、り。津、固、神、賀、詞、ふ、今、日、能、生、日、能、足、日、と、い、ひ、神、祇、官、坐、八、神、中、小、も、生、産、靈、足、産、靈、と、並、び、座、摩、御、巫、祭、神、中、小、も、生、井、神、福、井、神、と、も、並、び、是、を、以、て、思、ふ、よ、活、櫛、神、を、ゆ、起、て、生、活、の、字、此、意、ふ、て、も、を、賀、言、あ、る、を、以、て、美、稱、お、る、あ、る、べ、し。近江、固、蒲、生、郡、彦、根、神、社、と、○熊、野、久、須、



毘命熊野忍隅命熊野大隅命熊野忍踏命師説ふ熊野を  
地名あり。出雲国意宇郡の熊野あるは。今云。此熊野の  
段段委委く久須毘を。久志須毘此約約とるあり。志須を切れ  
注注べし。そ此久志を奇靈あり。今云。上上よ怪久志備坐坐  
大隅命とも。忍隅命をも云云は隅と同じ。忍隅須美の例は  
見命伊邪河宮段段比古由牟須美命命あり。美を耳耳此畧  
ありて。某産巢日神といふ巢日と通ひて。美を耳耳此畧  
外外るあり。忍穗耳命の所所云云るが如し。けり忍踏命とも  
申申は忍穗耳命と申申は。大御名と同意同意よて。美の一  
畧畧うべべ多多る外外也。神名式神名式は。出雲国意宇郡志保美神社あ  
る。此忍の意意此畧畧うべべとる神号神号あり  
在在母里郷井尻市上篁中中小社也也と云云り。や何何也也。けり此神

の御名も。出雲ある熊野も。地名を負坐負坐し。活津日子根  
命也。近江国外外る日子根根て。多地名残負坐負坐る。ふ就就て思思ふ  
ふ。此二柱神共共ふ。天降坐坐けむと。た亦亦し。死事實死事實もああく。は  
と御裔御裔も無無くて。天上上よ生坐坐て。永永ふ天上上よ神留留坐坐る神  
名名ちと聞えと。ゆふ。御名も此土土ある地名を負ませ。ゆ事  
を。姑疑疑ひ無無きと。能能た。活津日子根の天津日子根と  
も。故考考る。此時五柱男御子御子を生坐坐り。ゆ傳傳を  
誤誤ふて。實は三柱生坐坐し。活津日子根命は。即即天津日子根  
命命も坐坐まし。此此近江国近江国由由ある神神あり。如如く。熊野久須  
毘命ハ。即即天之穗日命命も有有さゆ。其其忍踏忍踏の富美富美や



と同言あるれ。此神の出雲、固造り祖より彼國の由ある  
ぞを思ふべし。見えぬるが如く、はと其御子天夷鳥命を  
武三熊命、武三熊、太人あども申は三熊を、やがて熊野小  
とれる名ある我も深く考はし。然れども、此時生坐る男  
書よもありありて、今改むべくも非神を、文を本の終の  
記して、考のみ記し、たを後、人あを考へて定べし。  
各小生坐る御子此三柱お、坐まはむを、深き所由  
あるべき事とぞ思はし。互に誓ひて生給へる御子れ、  
あるべし。謂をあき事。或人問、此誓ハ、あは須佐之男命  
の御心此明き我顯さむ爲あるふ。大御神も、諸共小宇氣  
比給ふを如何答前ふ云、る如く、宇氣比を、己が心の眞實

を顯し、はと其思ふ事此當否の徴を見むとひる事あれ  
む。實を一人して爲はきわざれる我、須佐之男命此、各誓  
てと申し給する。我心、大御神の思召は如くおはあら  
ぬを、其ハ御自も誓ひて、當否此徴を見給へや此御言あ  
るはく、扱大御神を、須佐之男命此、然を白し給するど、れ不  
深く疑ハ、よく思看しうば、其御疑の御心此、當否を、試給  
ハむと志て、其白し給ふは、おふも、互に宇氣比給へるあ  
らまかし。故ふ須佐之男命よ、決絶て生得給ふは、心と思  
召は男御子を、あて。汝不有異心、則其所生之子、必當男  
子。と詔ひ定給ひる。あ、の定給へる御言や、實は須佐之男







佐出男命出固無惡意矣。故詔

曰。是於後所生出。五柱男子者。

物實因我物而所成也。故自吾

子也。於先所生出。三柱女子者。

物實因汝物而所成也。故乃汝

子也。如此詔別給矣。

方知看固無惡意矣。大御神ハ加わくよ。須佐之男命此。

高天原を奪はむとの。悪き御心有て參上<sub>マ</sub>給<sub>ル</sub>るあら

むと。疑ひ所思<sub>オ</sub>を。此詔定給<sub>ル</sub>へるまふ。男御子

を坐<sub>マ</sub>し<sub>ル</sub>。此<sub>コ</sub>方<sub>テ</sub>須佐之男命の固<sub>ト</sub>を惡<sub>ク</sub>心<sub>ヲ</sub>を

○古史傳八

○十七



布フ○是於後ハ本ホ是後と有を師説ふ。是と輕カく讀切べし。是後と連讀べからば。是とは五男三女を總スて指去御言ふれむ。亦オ言れし。依て目易メく於字字入て文字成し。於○所生之阿禮麻世流アと訓シ。阿礼坐アと云天皇卷ミ見えと。彼カて此の御言を。汝所生吾所生と。有べきと。亦オ然ハ何らて。後先とあること。師云。此時生坐る神とち。誓チ此間ア一連ツ生坐て。三女五男共ニ。大御神と。須佐之男命との御子ふて。此を大御神の御子。此を須佐之男命の御子と云分ワ。本あらば。此此詔ミコトノリふ。亦オ先後を以て詔ミコトノリふ。此故亦オ。亦オ不フ此事下シも次々いふを。

見べし。○今云。此餘シ。書紀の旨と古事記の旨と違へる由を言れ。説シ。何れど。見れ。二典此旨とも。異ヒ。於見む人あらべ。見て曉サべし。於て後小生坐る方を先詔ミコトノリひ。先小生坐る方を次ツ詔ミコトノリふ。は。物實モノノミの尊卑ウツクシを以て亦オ。御自詔ミコトノリ御言ミコトノリある。如カ此。○男子女子を。師云。比古美古ヒコメコ。比賣美古ヒメメコと訓シ。比古美古ヒコメコ。子て。言重コトカシ。孝元紀コトノリ。生ナ。男ヲ。一ヒト。女ヲ。まマ。垂仁紀タケヒトノリ。生ナ。三男ヲ。おれらの男女を。然シカ。訓シ。依ヨ。物實モノノミハ。師云。毛能モノノミ邪泥ヤネと訓シ。紀キ。物實モノノミ。此云。望能ノゾミ志シ。書紀キ。物根モノノミと。亦オ。佐泥サネと。多泥タネ。とは。其物モノも。名ナも。通ト。後世ノチノヨも。人の母を云イ。某腹ナニノハラ。父を云イ。某種ナニノタネと云。本草ホノクサの種子タネも同ナニ。此も其意コトバあり。



故其先所生出神多紀理毘賣

谷川氏曰五男神之物實曰神此物あれど曰神ハ父の如く須佐之男命之母の如しと云るハさることなり。○今云此は依ておと思ふ三女神之物實須佐之男命此物あり。○須佐之男命を御父の如く大御神を御母の如き謂ふは起る。○我物とは彼御統之珠を詔ふれ也。○自吾子也。師云この自在下文小自我勝とある自も同じ彼處小説あり。第四十一段。○汝物を十拳劔あり。○詔別給とは師云五男三女渾て一ッ大御神と須佐之男命との御子よて本む何れの御子と云別を無きを今始て物實を尋て如此別とるふれ也。詔別と云語を應神卷ももあり。

命者。亦云田心坐胸形出奥津

宮。故亦名謂瀛津島比賣命。次

狹依毘賣命者。亦名市杵坐胸

形出中津宮。故亦名謂中津島

比賣命。次多岐都比賣命者。亦







田心毘賣命。田心を多許理と訓げし。即本小然訓め心を

十段八意思兼神。此は多紀理の轉れるふて。異なる古との

処に注べし。胸形ハ。和名抄ふ。筑前国宗像郡これ形也。名

義ハ下文小見也。○奥津宮師云。此處を今奥島と云島小

て。大島の西北四十八里ありとぞ。或三十里やも五十餘

程あり。まゝと宗像社記云。澳津島ハ今を奥之島と云て。大

島をり北方海中四十八里にして。島の遠ぐり一里あり。

人家あり。社を西南み向て立多。まふ山下平地の高き所

あり。今社一人。大島小住て。河野氏もて。一乃甲斐と称

と云。はと遠賀島ともいふと云ゆ。故思ふ小和名抄も。宗

像。是る其郡も宗像と云郷も見也。されど彼國の地理

を知らぬ。此をいかに有む。今ハ驚かし。おくあり。

○市杵島比賣命。師説ふ。市杵ハ以ておくし。亦也。此神の御

名を佐依

と云。市杵と云こと。前後の二柱の御名此例をハ類也。

と何也。神名式ふ。安藝国佐伯

郡。伊都伎島神社。名神。あ也。此神ありとぞ。貞觀元年正月

正五位下。伊都岐島神。從四位下。同九年十月。授從四位上。

と国史小見也。百練抄ふ。治承三年二月廿四日。以安藝国

伊都岐島社。可加。并二社之次第。并祭祀日事等。有其沙汰。

右大臣以下。大外記頼業。師尚等預。勅問計。申之。以二月十

一月上。申日。可爲祭祀式日之由。被定仰。先議才卿。月十八

日。上皇幸。大相国亭。安藝伊都岐島。小巫。翻廻雪之袖。爲。獻覽也。と見え。はと山槐記ふ。同

年三月二十六日。伊都伎島祭也。其詔旨。始自今年十一

祭。尔限。以永代。天幣。帛。潔妙。と何也。○此御社を今嚴島海

尔調。饒。氏。可。令。發。遣。給。奈。利。中。在。在。て。国。の。一。宮。を。



るとし帳考ふ云りさる島名をいれり  
まると云ふ此御名を記出さるべし  
○中津宮師云  
此處は今大島と云まゝ中津島と云といふ島あり神湊と云處と  
記。三里北の海中ふ在せどまゝ田島より北三里とも云  
と云て神湊北海濱より三里北の海中ふあり鳥の免ぐ  
記。三里人家多くあり社一人河野氏より二乃甲斐と  
いふと○高津比賣命高津を多岐都の轉れる言ふて異  
云り  
ある事あり○邊津宮師云此處は今田島と云せど或人  
の宗像宮を田島と云或て此御社古神湊を云海邊に坐  
一里半ばかり隔れりしを後ふ今地より移奉せしとも云記信コトも然らば古の邊  
津宮を神湊ふて名も由有今此田島の地ふを非ざ記  
ゆ。猶とく尋ねべし宗像社記云邊津宮を田島村より  
社を西北より向ひ立とまふ古を神湊

の東六町ふあり今も其跡を神の幸屋敷と云て田島を  
記。半里許をめぐり後深草天皇建長年中大宮司長氏  
の時神此告ふを記して田島より遷し奉ると云傳ふ昔大宮  
司を田島に居住せしを天正年中滅亡びて其後記  
於りに残れるを三所の社人合せて十三人あり其内十  
一人ハ田島の社職あり其内三家を大宮司の子孫と  
て深田氏二家嶺氏一家これあり十三人此内二人を大  
島に住て其内一人を中津宮一人を澳津宮此社人あり  
と云記。奥中邊とは其在所を以て名けしあり今云ふ  
記。坐る神各書紀と社記の説と各々違はるを今を古事  
記に依てあるあり其を下ふ大國主神此奥津宮に坐る  
多紀理毘賣命御合坐しまよ邊津宮に坐る高  
津比賣命御合坐しと有まよ叶へれむあり○胸形  
君。姓氏錄河内國。宗形君大國主命六世孫吾田片隅命  
之後也。と見ゆもや君の加婆禰を記しを天武天皇紀三  
年十一月の處。胸方君賜姓曰朝臣とあり故姓氏錄宗形  
朝臣ともあり



て此三神を此氏人の以祭く所以を下第百大圀主神。  
 娶胸形奥津宮坐多紀理毘賣命而令生給之子味鉏高日  
 子根神云く。ま第百娶邊津宮坐高津比賣命而令生給  
 之子。積羽八重言代主神と有師云或説よ此大圀主神  
 命よ娶坐と云を信びして。多紀理比賣高津比賣  
 と云をさら由あき私の妄説あり無形の神ぞあど云  
 ふ後世の謬説を守り大圀主神を素よ此御社不因あ  
 て加ふる言ハ云よ即吾田片隅命の  
 るを胸形氏の始祖天日方奇日方命は。世の祖あり。  
 大圀主神此和御魂三輪大物主神の武茅渟祇命の女勢  
 夜陀多良比賣を娠して生せ給へる御子あしらば其  
 因不依て奇日方命此世孫大田根子命崇神天皇此

御世も始て大三輪社も仕奉れ彼卷七年の処たれ大  
 神氏の始祖あかまむ胸形氏を上件の所由も依て。  
 大神氏より別りて此御社も仕奉まるあるべし。姓氏録  
 別宗形朝臣同祖吾田片隅師云宗形朝臣鳥麻呂てふ  
 命之後也と有を思ふべし。人宗形郡大領オホイミツもて宗形神主とること續紀十十三も見  
 え大領とることハて然る例あしを延暦十九年十二  
 月勅も彼郡大領として此神主を兼帯るあとを停じら  
 れしことはと此神主の任六年も限りて相替るあとあ  
 ぞ後紀も見え多也。今云あ不此氏のあを崇神天皇卷八  
 見べ。〇三前大神神名式も筑前圀宗像郡和名抄も宗像  
 牟奈加多と有



宗像神社三座。並名を何也。此神の御事。應神天皇卷。雄畧天皇卷。おども出て神功皇后此韓を降伏給ふ時。此大神相共手カ力を加予給ひし事何也。まゝ履中天皇卷。坐于筑紫三神と何るも是あり。お承和七年四月授勲八等宗像神。從五位下。嘉祥三年十月從五位上。仁壽三年二月加正五位下。天安元年十月正四位下。勲八等宗像神授正三位。貞觀元年正月從二位。同年二月正二位。おど囡史史見えと也。お不此餘。大和囡城上郡宗像神社三座。並大月次。○類聚三代格。宗像神坐城上郡登美山と何る此お正雄畧天皇紀九年遣凡河内直香賜与采女祠胸方神と何り。此時帝都。此郡長谷朝倉宮ありし。謂胸方神を當社。まゝ格文。登美山と有。今外山村

社を今春日と元慶四年三月以大和囡城上郡宗像神預於官社。同五年十月大和囡城上郡從一位勲八等宗像神社。准筑前囡本社置神主。以高階真人氏人爲之。おど囡史見也。然れ。此御社を筑前と移祭られし也。此郡大三輪神の鎮坐せむ。さも有べき事。おま尾張囡中嶋郡宗形神社。當囡神名帳。從二位宗形。書の集説と云もの。今囡府宮の下野囡寒川郡胸形神。別宮角玉社を云。こまありと云り。下野囡寒川郡胸形神。當囡此社考。今寒川村に有り。伯耆囡會見郡胸社。云。隣郡那須郡。三和神社もあり。伯耆囡會見郡胸形神社。齊衡三年八月。伯耆囡宗形神。從五位上。と囡史見也。今胸形村と云。在り。と帳考。云。備前囡赤坂郡宗形神社。今足里村と云。在。と當囡式社考。云。り。さて同郡。お並て。鴨神社有り。此を言代主神。味鋸高日子



根神子坐せ<sup>杜</sup>由<sup>所</sup>あること上<sup>ノ</sup>云<sup>フ</sup>如<sup>ク</sup>津高郡宗形神社。  
今大窪村と云<sup>フ</sup>不在<sup>ニ</sup>と式社考<sup>ス</sup>云<sup>フ</sup>はて同郡<sup>ニ</sup>並<sup>ニ</sup>あ  
て鴨神社あり。ま<sup>と</sup>隣郡上道郡<sup>ニ</sup>大神神社もあり。  
ど式<sup>ノ</sup>不在<sup>ニ</sup>。○埼門山。此山の在所<sup>ニ</sup>同心<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>あるは<sup>レ</sup>ま  
ど詳<sup>カ</sup>あら<sup>レ</sup>。玉木正英<sup>ト</sup>い<sup>ハ</sup>人<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>説<sup>ヲ</sup>三女神始<sup>ニ</sup>降臨  
頂<sup>ニ</sup>磐石あり。常<sup>ニ</sup>清水を<sup>レ</sup>湛<sup>ヘ</sup>。早魅<sup>ノ</sup>洞<sup>ニ</sup>事<sup>ヲ</sup>あ<sup>ク</sup>雨  
雪<sup>ニ</sup>汚<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>。此を石清水<sup>ト</sup>稱<sup>ス</sup>。後<sup>ニ</sup>今<sup>ノ</sup>社地<sup>ニ</sup>遷<sup>リ</sup>祭<sup>ル</sup>  
とあり。然<sup>レ</sup>ま<sup>と</sup>埼門山<sup>ヲ</sup>云<sup>フ</sup>。○青鞋玉。八阿袁奴能玉<sup>ト</sup>  
今い<sup>ハ</sup>御許山の古名<sup>ニ</sup>あり。○第五段<sup>天</sup>。小<sup>云</sup>る  
訓<sup>ベ</sup>し。奴<sup>ヲ</sup>玉<sup>ヲ</sup>を云<sup>フ</sup>古言<sup>ニ</sup>あり。ま<sup>と</sup>上<sup>ノ</sup>第五段<sup>天</sup>。小<sup>云</sup>る  
が如<sup>ク</sup>し。書紀<sup>ニ</sup>瓊<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>書<sup>テ</sup>瓊<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>努<sup>ト</sup>を<sup>レ</sup>め<sup>テ</sup>は<sup>レ</sup>鞋<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>  
さ<sup>レ</sup>花<sup>ニ</sup>瓊<sup>ノ</sup>由<sup>リ</sup>あり。れ<sup>ど</sup>古書<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>を用<sup>ヒ</sup>と<sup>シ</sup>。其  
を舊事紀<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>鞋<sup>ノ</sup>槍<sup>ヲ</sup>を書<sup>キ</sup>。天武天皇紀<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>鞋<sup>ノ</sup>娘<sup>ト</sup>と見え

聖武天皇紀<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>鞋<sup>ノ</sup>比賣<sup>ト</sup>とあり。師<sup>云</sup>鞋<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>さら<sup>ハ</sup>玉<sup>ノ</sup>子  
書<sup>ゴ</sup>と<sup>キ</sup>例<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>。璣<sup>ノ</sup>字<sup>ヲ</sup>あ<sup>ラ</sup>は<sup>レ</sup>て鞋<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>。玉<sup>ノ</sup>の事<sup>ヲ</sup>あら<sup>ハ</sup>む<sup>ル</sup>を  
を<sup>レ</sup>遊<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>書<sup>ク</sup>を<sup>レ</sup>誤<sup>ル</sup>れ<sup>ル</sup>。○八尺紫鞋玉。八尺を彌  
瓊<sup>ノ</sup>曲玉<sup>ト</sup>あ<sup>ラ</sup>せ<sup>テ</sup>云<sup>フ</sup>例<sup>ニ</sup>あり。古言<sup>ノ</sup>の格<sup>アリ</sup>神壽詞<sup>ニ</sup>青玉能水  
江王<sup>乃</sup>云<sup>フ</sup>と<sup>シ</sup>ある青玉<sup>ノ</sup>同<sup>シ</sup>。○八尺紫鞋玉。八尺を彌  
眞明<sup>あり</sup>あるま<sup>と</sup>。上<sup>ノ</sup>云<sup>フ</sup>は<sup>レ</sup>て此<sup>ニ</sup>紫<sup>ノ</sup>彌眞明<sup>ノ</sup>き玉<sup>あり</sup>  
由<sup>リ</sup>あり。○八咫鏡のあとを<sup>下</sup>第四十<sup>ノ</sup>ま<sup>委</sup>く云<sup>フ</sup>は<sup>レ</sup>て  
三宮<sup>あり</sup>。此<sup>ニ</sup>三表<sup>ヲ</sup>を置<sup>ク</sup>は<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>さ<sup>の</sup>ち<sup>の</sup>置<sup>多</sup>る<sup>ハ</sup>へ<sup>依</sup>あり。  
上<sup>ノ</sup>文<sup>ニ</sup>居<sup>テ</sup>埼門山<sup>時</sup>と<sup>シ</sup>何<sup>レ</sup>依<sup>ヲ</sup>を思<sup>フ</sup>は<sup>レ</sup>し。は<sup>レ</sup>て三宮<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>  
と表<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>み<sup>残</sup>し<sup>留</sup>めて<sup>テ</sup>現身<sup>ヲ</sup>を何<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>坐<sup>マ</sup>せると云<sup>フ</sup>。



須佐之男命此幸<sup>ナ</sup>也。ひとまが根之堅洲<sup>カクスクニ</sup>圀<sup>ニ</sup>も往坐<sup>シ</sup>也。思  
小<sup>コ</sup>依<sup>ヨ</sup>り。其由<sup>ニ</sup>、第八十六段、須勢理毘賣、されバ崎門  
山<sup>ノ</sup>居<sup>マ</sup>せらる。その降坐<sup>ス</sup>。唯志<sup>ハ</sup>ほし此間<sup>ホ</sup>あるべし。○  
成<sup>ナ</sup>神體之形、而<sup>ハ</sup>字<sup>ハ</sup>此<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>ふて。彼<sup>ニ</sup>三表<sup>ヲ</sup>を三柱<sup>ニ</sup>、神<sup>ノ</sup>の御身  
此<sup>レ</sup>形代<sup>ト</sup>と爲<sup>レ</sup>て。と云<sup>ハ</sup>ふ也。○隱<sup>ノ</sup>之<sup>ハ</sup>伊波比給<sup>ヒタキ</sup>比伎<sup>ヒキ</sup>と訓<sup>ベ</sup>  
し。言義<sup>ニ</sup>、第百三十一段<sup>ニ</sup>注<sup>ス</sup>べし。○因<sup>レ</sup>云<sup>ハ</sup>身形<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>義<sup>ヲ</sup>去<sup>レ</sup>りて聞<sup>キ</sup>  
え<sup>ル</sup>也。ま<sup>ニ</sup>本書<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>人<sup>ハ</sup>改<sup>メ</sup>曰<sup>ハ</sup>宗像<sup>ト</sup>と<sup>ハ</sup>也。此<sup>レ</sup>を民部式<sup>ニ</sup>も凡  
諸<sup>ノ</sup>圀部内郡里等<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>並<sup>ニ</sup>用<sup>フ</sup>二字<sup>ヲ</sup>必<sup>ズ</sup>取<sup>リ</sup>嘉名<sup>ト</sup>と有<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>く<sup>レ</sup>り以  
前<sup>ニ</sup>も此<sup>レ</sup>制<sup>ハ</sup>也。と聞<sup>キ</sup>えて。出雲風土記<sup>ニ</sup>も彼<sup>ノ</sup>圀<sup>ノ</sup>地名  
此<sup>レ</sup>字<sup>ヲ</sup>を神龜玉<sup>ニ</sup>年<sup>ノ</sup>改<sup>メ</sup>る<sup>ノ</sup>由<sup>ヲ</sup>多<sup>ク</sup>見<sup>エ</sup>ぬれ<sup>ル</sup>也。此<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>也。

や改<sup>メ</sup>る<sup>ノ</sup>也。扱<sup>テ</sup>古書<sup>ニ</sup>も胸形<sup>ノ</sup>宗形<sup>ノ</sup>胸方<sup>ノ</sup>外<sup>ノ</sup>どくさ<sup>ノ</sup>く<sup>レ</sup>ふ書<sup>ヲ</sup>  
と。此<sup>レ</sup>も身形<sup>ト</sup>と書<sup>ク</sup>は正<sup>ニ</sup>字<sup>ト</sup>もて。宗像<sup>ヲ</sup>を書<sup>ク</sup>也。郡名<sup>ヲ</sup>も嘉名<sup>ト</sup>  
を取<sup>リ</sup>。後<sup>ノ</sup>の御制<sup>ト</sup>と知<sup>ル</sup>べし。和名抄<sup>ニ</sup>も筑前圀<sup>ノ</sup>宗像<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>奈<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>  
也。何<sup>レ</sup>也。身<sup>ヲ</sup>を年<sup>ト</sup>と云<sup>ハ</sup>例<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>し。即<sup>チ</sup>身<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>形<sup>ノ</sup>義<sup>ヲ</sup>ある<sup>ノ</sup>也。け<sup>レ</sup>て貝  
原<sup>ノ</sup>氏<sup>ガ</sup>當<sup>ノ</sup>圀<sup>ノ</sup>續<sup>ノ</sup>風土記<sup>ニ</sup>も宗像<sup>ノ</sup>山<sup>ヲ</sup>を赤馬<sup>ノ</sup>山<sup>ト</sup>外<sup>ニ</sup>也。宗像<sup>ノ</sup>龍<sup>ノ</sup>  
を圀<sup>ノ</sup>府村<sup>ニ</sup>も在<sup>リ</sup>也。お<sup>レ</sup>も云<sup>ハ</sup>む。け<sup>レ</sup>る山<sup>ノ</sup>名<sup>も</sup>龍<sup>ノ</sup>名<sup>も</sup>有<sup>ル</sup>也。  
也。ま<sup>ニ</sup>和名抄<sup>ニ</sup>も此<sup>レ</sup>鄰郡<sup>ノ</sup>遠賀<sup>ノ</sup>郡<sup>ニ</sup>も宗像<sup>ノ</sup>郷<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>也。此<sup>レ</sup>を古<sup>ノ</sup>宗  
像<sup>ノ</sup>郡<sup>ト</sup>一<sup>ニ</sup>郡<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>也。後<sup>ニ</sup>も分<sup>リ</sup>也。と<sup>ル</sup>よ<sup>ハ</sup>非<sup>ズ</sup>る<sup>ノ</sup>也。上<sup>ノ</sup>か<sup>レ</sup>る  
の<sup>レ</sup>處<sup>ニ</sup>注<sup>ス</sup>せる<sup>ノ</sup>師<sup>ノ</sup>說<sup>ヲ</sup>を合<sup>セ</sup>考<sup>ヘ</sup>べし。け<sup>レ</sup>て郡<sup>ヲ</sup>を許<sup>リ</sup>富理<sup>ト</sup>と訓<sup>ス</sup>こと。ほ<sup>ニ</sup>郡縣<sup>ヲ</sup>あ  
ど<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>也。成<sup>務</sup>天皇<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>五年<sup>ノ</sup>處<sup>ニ</sup>も委<sup>ク</sup>注<sup>シ</sup>也。○宇佐<sup>ノ</sup>嶋<sup>ノ</sup>也。



和名抄云。豐前國宗佐郡。とある是なり。

此地の志と委く神武天皇卷ノ注

神名式云。豐前國宗佐郡。八幡大菩薩宇佐宮。

東大寺戒壇神名帳云。今それハツノ宮此第二殿小。

三柱女神坐まはるとぞ。

中西八幡本紀云。三所神殿相並東

佐宮也。中為第二殿。是田心姫命。湍津姫命。市杵島命也。

道主貴此三神先八幡宮鎮座此地仍為地主神是宇佐大

宮司家説也。第五殿大帶姫命也。凡御宮地山也。則小倉山

是也。川水廻流如島故云。宇佐大宮司佐公姓。宇佐都

彦命之後也。祠官四姓。宇佐大神田部漆島と見也。信小此

説の如く。奉るべし。宇佐都古命の事を神武天皇卷ノ

見えより。侍て此御社。大神氏此仕奉ること。上文胸形

君此下。云事小由あり。見合はべし。臨時祭式。凡八

幡神宮司。以大神宇佐二氏補之。不得雜補他氏。按。此處

と見えとる。大神を為る。と三女神小由あり。

も。此女神とちの天降坐して。住坐せし。一所あり。む所

由小依て。古く社を在しを。後小八幡大御神と。息長帶比

賣命を配祭。巳給。予る小ぞ有。彦き。然る例いぞ多う。已。

此宮の事。應神天皇卷。元年。此処。委く注べし。ま。清和天皇紀。貞觀元年。小。大

政大臣。藤原良の東京一條第。此三神社有て。筑前國宗

像。神小。正二位を授奉。給ふ時。共小正二位を授奉。と。方

ふこと見え。と。已。

故其後所生出。五柱男子出中。

正哉吾勝勝速日天出忍穗耳



命者。亦云天大耳命。亦云天忍。總根命。亦云天忍。總別命。

天照大御神。特鍾愛而常懷御

腋而育賜矣。仍奉稱腋子矣。此

神御合產巢日神出御女。天萬

栲幡千幡比賣命。千幡比賣命。亦云栲幡千

比賣命。亦云萬幡豐。秋津師比

賣命。亦云萬幡豐。亦名火出戶

幡比賣命出兒。玉依毘賣命而。

先所生出神名。天照罔照日子

火明命。亦云天。此神娶天道日



メノミコトニテ。ウミコト。アノカグヤノミコト。亦  
女命而所生出兒。天香山命。云

天香山命。此者尾張國造尾張連。  
天香山命。此者尾張國造尾張連。

丹波國造石作連。丹比連。禊多

治比宿禰。蝮壬部首。丹比周敷

連。津守連等。出祖也。妹

天大耳命。御名義。上第三段。天之忍穗耳命。申以御名

之處。注せし。師説。依て心得。○天之忍穗根命。

忍骨。師説。忍穗をよみ云。如く。大あり。根も耳と

云。如き尊稱。其根と云。殊も多。上の惶根。神

かる日子根も同じ。けり開化。卷ある。神大根。王を。書紀。し

神骨と。此例。て忍穗根。忍大根。れる。あと。枝。知。は

治郡。許波多神社。三座。並。大。月。と。御社の祭神を。山

城風土記。宇治郡木幡社。名。天。忍。穗。根。命。と。あ。巴。此。を

引る。文。多。ゆ。さ。不。此。文。並。所。あ。何。る。う。ち。未。引。る。所。し

在。穗。根。の。間。ま。長。字。あ。り。此。も。由。あ。き。あ。ら。ば。其。を。天。忍



穗井此名密まよ忍石之長井とも云ふ長子由ありて聞  
也れむありぬ布秋紀よ此御社の事を本縁自昔若無存  
知之人欵如風土記者宗廟之神今宗可異他欵弘長諸祭  
與行之時當社祈年月次祭幣帛神主請取之由載本官史  
生散狀當時現在欵と云正侍て三座の内一座を風土記  
の傳ふて炳焉を餘りの二座を何れ神ふらむ若くハ天  
穗日命天津日子根命をあらざるう此御社に並て天穗  
日命神社を載され別神なるのまよ宇佐宮を八幡と  
申し此御社を木幡と申はこと柔田強田と對しと侍て  
正と聞えて由あり後人お不熟考ふべし

清和天皇紀よ貞觀元年正月授許波多神從五位上と見  
也。まの御社を今木幡山とまよ式よ豐前國田河郡不忍  
骨神社あり此神に坐り非慈り思ひ定めたり。仁明天  
和四年の処清和天皇紀貞觀七年二月の処天忍穗別  
命此に舊事紀よ見えぬ亦名あり。まよ若くハ石門別  
命の名を忍石別と

云ふが移りて忍穗別とされる。○腋子本書に此處の注  
を似とると正誤れる外らむ。○天忍穗別  
よ。今俗號稚子謂和可古是其轉語也とあり。此よ依て按  
ふよ。凡て和加てふ言を此の故事より出ると言ふても  
也。和伎ありしや。和久とも。和加とも。轉れるよて。彼某和  
久基てふことを是より起れるありなり。此史よも數見  
え。万葉よも數有。三卷よみおし久米能若子十四  
あ。○天萬栲幡千幡比賣命。栲幡千々比賣命。萬幡比賣命。  
師云。纂疏よ。幡猶機也。夫女功之事以織紵爲本。故取以爲  
名也。とあり。此意あり。但し機具を指て云ふは非。織と  
る物。絹布。を云ふ。仲哀卷よ。千繪高繪。万葉よ。倭文幡之  
帶。和名抄よ。綺加无波太。と云。是ら



皆織れる物多指て。万葉十小古（カ）織てし八多（タ）を此也。ふ波多と云例あり。然れ衣小縫て云。是も織る物を指て八多と云。然れ尤栲幡も栲布を云。当古と倭文布字倭文幡也云。準へて知はし。萬を懸居。大人説ふ。宜てふ言を物の足り備まゆを云。與呂豆。與呂比。おども此と別をとり言ふ。とある。此小依て思ふ。此も數の方。此意ふを非て不足とれく。美麗く織やく。此布とる布帛てふ意。萬幡とも萬栲幡とも云あり。千幡といひ。千く比賣と云。小照して。の意。千は斯くの約也とる。おて。凡て同音の重ある言。例常の千くとある。同じ。其由を和名抄。釋名云。穀。其事あり。千くとある。同じ。其由を和名抄。釋名云。穀。其

形緘。視之如粟也。唐韻云。緘。繪文貌也。此間云。之。良岐。とある。緘ハ他の字書。縮也。とあり。然れを之。良岐。縮と依貌。今世。縮布。縮緬。おどの如くある。茲云。お。さる。在上。代。おも布帛。れ緘。さる。を。美好物。おさける。故の御名。ある。は。し。○萬幡。豐秋津師。比賣命。萬幡。豐秋津。比賣命。師云。秋津師。万葉三。秋津羽之袖。十三。蜻蛉。領中。おど。ある。如く。蜻蛉の羽。乃如く。薄く。細精。き帛布。を云。れ。仁德。卷。皇后。御歌。夏虫。れ。火虫の衣。とある。も同意あり。古漢籍。おも。衣の。う。る。を。し。師。を。師。が。此。約。也。とる。お。て。知。年。を。志。く。年。と。も。通。ハ。云。を。上。お。る。千。と。此。乃



師と同くて共小緘シラき多るを云ル也。大鏡ミタマも髪カミちがら秋津比賣アキツヒメとも申マシひ也。此師シを入イまはしてシも稱ナせらるル也。○火之戸幡比賣命ヒノトノハタヒメノミコト火は借字カサヒ小て檢ヒあ也。故コト富トと訓ムむ也。和名抄織機シラヒメ具ツも。通俗文ツツ云受緯ウケヅメ曰クハ等ナリ和名比ヒ亦謂モト之檢ヒ今按イマニ等ナリ說文ツツ云杼者機シラヒメ之持緯シラヒメ者也。と見え字鏡シラヒメ小。杼シラヒメ杼シラヒメ絹織シラヒメ比伊ヒとある是也。戸ハ豐トヨあ也。豐秋津比賣トヨアキツヒメの豐トヨと同く美稱ミナモトあ也。○玉依毘賣命タマヨヒヒメノミコト毘賣命ヒメノミコト玉は容顔カホの美麗ツレハレきを稱ナすとあるはシく依ヨを師云字を借字カサヒ小て余呂志ヨロシ也切キ也。依ヨは依ヨ也。呂志ヨロシを理ツツ余呂志は縣居大人コノノリ説ハす物の足タラシめ具ツを依ヨを云余呂豆ヨロシマメ余呂布ヨロシフれども同言ツツの分ワれらるル也。万葉一マンヤク取與呂布トクヨロシフ天乃香アメノカ

具山ツツとあるも此山ツツのともをシてシ此ツツ足タラシ多る哉ナラニ云フる也。はと宜ヨシ奈倍ナハヒ吾背カ乃君ミコあど云依ヨも同ツツ也。云れと依ヨが如ツツ也。此意を以ツツて美稱ミナモトとる名ナあり。名の例ツツは男オト小て飯イ依ヨと女メ小て伊須氣余理イヌキヨリ比賣ヒメ息長イセナガ水依ミヅヨ比賣ヒメ水穗ミヅホ五百依イホ比賣ヒメあどあり。統紀ツツ此ツツ七ツツ小と呂志ヨロシ女メと云名ナも見えとあり。をシあり。ちて玉依タマヨヒてふ同名ツツは海神ウミノカミの御女ミメ小。玉依毘賣命タマヨヒヒメノミコト第百六十三ヒャクロクサニ三嶋ミツシマ溝織耳ミヅオリミミ神カミの女メ小。活玉依毘賣イハタマヨヒヒメあり。賀茂カモ御祖ミソの御名ミナ也。玉依毘賣命タマヨヒヒメノミコトあ也。まツツと此ツツ比賣命ヒメノミコトの御兄ミケ也。皆右ミダ比意ヒイの稱名ナ也。此ツツ神カミ娶ムス丹ニ易ヨシ姫ヒメ生ナ兒コ火瓊ヒノシラ杵シラ等ナリとある丹ニ易ヨシ姫ヒメを此ツツれり。玉依毘賣命タマヨヒヒメノミコトの異ツツ名ナあり。異ツツ神カミの異ツツ名ナあり。傳ツツ々ツツ知ツツ々ツツと。○天照アマテラス罔ムスヒ照ヒメ日子ヒメノミコト火明命ヒノミコト天アマ火明命ヒノミコト。○の火明ヒノミとも小。本阿ホア加理カと訓ム法ホウ也。能ツツ



と能を請付し侍る御名義まをそ此委祀去せ下第四十六段

小云此天香山命此命の御名此意も下第四十六段小云

信し。○尾張圀造尾張連尾張を圀名お正和名抄小乎波

利と何正此圀のおと委くハ景行天皇卷小注べし圀造

本紀云尾張圀造志賀高穴穗朝以天别天火明命十世孫

小止與命定賜圀造と見え連姓の去々ハ上第二十五段小注

正祀姓氏錄山城圀神小尾張連火明命子天香山命之後

也ま左京神別尾張連火明命之男天香山命之後也と見

え尾張宿禰火明命二十世孫阿曾連之後也ま右京神別尾

張連火明命五世孫武礪目命之後也此氏人天長十年忠宗宿禰と云姓

を賜ま大和圀神別尾張連天火明命子天香山命之後也侍

と河内圀尾張連火明命十四世孫小豐命之後也四字天

小一とあり侍て小豐命のとおとあり侍て此氏をも

連姓お正しを次くみ多くは宿禰姓を賜へ正其天武

三年の処小尾張連賜姓曰宿禰と見えとを始久小

統紀大宝二年十一月の処天平十九年二月の処天平宝

字二年三月の処神護景雲二年○丹波圀造圀造の事を

十二月此処おとみ見えとり凡て成務天

皇卷○石作連石作在和名抄小山城圀乙訓郡石作以

利を有お依て訓法此を姓氏錄左京神別小石作連火明命

六世孫建眞利根命之後也垂仁天皇御世奉為皇后日葉

酢媛命作石棺獻之仍賜姓石作大連公也ま山城神別石作



部火明命之後也。ま津國石作連火明命六世孫武椀根命之後也。ほ和泉石作連火明命男天香山命之後也。あど有ふ依て記せ神別。あ不建眞利根命の石棺を作れる事の委ま由を垂仁天皇卷よ注べし。  
○丹比連和名抄ふ河内國丹比太知郡と見え履中天皇紀ふ多遲比と有ふ依て訓法し。此を姓氏録河内國丹比連火明命男天香山命之後也。ま和泉國丹比連火明命男天香山命之後也。ま右京丹比宿禰火明命三世孫天忍男命之男武額赤命七世孫御殿宿禰男色鳴大鷦鷯天皇御世皇子瑞齒別尊誕生淡路宮之時淡路瑞井永奉灌御湯于時虎杖花飛入御湯瓮中色鳴宿禰稱天神壽詞奉號曰多治

比瑞齒別命乃定多治比部於諸國爲皇子湯沐邑卽以色鳴爲宰令領丹比部尸因號丹比連爲氏姓と有ふ依て記せ皇卷。あ不此事委く反正天天○禰多治比宿禰姓氏録河内國禰多治比宿禰火明命十世孫殿諸足尼命之後也。あ不決めて上の丹比宿禰條に御殿宿禰男兄男庶モロ決て上の丹比宿禰條に色鳴宿禰とある人其心如女故賜禰爲御膳部神別。此人の御湯の事にあはる居たりし故に皇次弟男庶其心勇健其力足制四十千軍衆故賜鞞號四十千健彦因負姓鞞負と有ふ依て記せ神別。○蝦壬部首姓氏録大和國小蝦壬部首火明命孫天五百原命之後也。ま神別



津<sub>四</sub>國<sub>神別</sub>蝮部、火明命<sub>世孫</sub>蝮<sub>壬部</sub>大手之後也。と有る依  
て記せり。蝮を多遲比<sub>と訓</sub>まとは。反正天皇の大御名此  
多遲比を。古事記<sub>に</sub>此字を書れどあり。○丹比周敷連。姓氏錄<sub>左京神別</sub>。丹比須布火明命三  
世孫。天忍人男之後也。又云丹比連。火明命之後也。續紀天  
平寶字八年七月己酉。伊豫國周敷郡人。多治比連眞因等  
十人賜姓。周敷連。天平寶字八年。伊豫國人大初位下周敷  
連眞因等二十一人賜姓。周敷伊佐世利宿禰。あど見也。ま  
と式。伊豫國桑村郡周敷神社あり。はと和名抄。周敷  
郡あり。周敷神社。桑村郡。入るを思ふ。○津守連。  
此郡を桑村と分りあるを依へし。

姓氏錄<sub>攝津國神別</sub>。津守火明命之後也。まと津守宿禰。火明  
命八世孫。大御日足尼之後也。皇紀十三年十二月津守  
連賜姓。曰。宿禰。まと和泉國。津守連。火明命。男。天香山命之後  
也。とある。よ依て記せり。はと津とは。即。攝津國を云ふ。  
國号のとしハ仲哀天皇。卷二年此処よ云べし。津守と云ふ由を。應神天皇紀  
の。五百船悉集於庫水門。當時置津守司。と見え。とる  
よ就て按ふ。此時置れし津守司ハ。火明命の御裔<sub>ニ</sub>。其  
を神功皇后の御世よ住吉神主と爲る。ひし。田<sub>タ</sub>裏<sub>モ</sub>見<sub>ミ</sub>宿  
禰<sub>ノ</sub>。或ハ其子<sub>孫</sub>。兼て津を守り。給ひ。故津守連とを  
負<sub>オヒ</sub>於<sub>ケル</sub>らむ。和名抄。西成郡免原郡。津守郷。も。はと津守  
あり。此氏人の住し里ありべし。



次天穗日命 亦云天出 出兒武 夫比命

てふ氏を貢るを。おれ始あるを。かの田裳見宿禰は。火明命八世孫。大御日足尼をゆ出さる故ふ。此氏姓を大御日足尼之後也。とも有あらむ。侍て此人を。天孫本紀ふ。火明命八世孫。倭得王彦命。亦云市大。と有る人あるは。くお布也。されど御稻のうち。何かくて火明命之後也。と云香山命之後也。と云依之。其出自を記されとる物あり。何姓氏如此。くあるを。く心。お布火明命の御裔ハ。いせ多し。下得て。姓氏録を見べし。第四十六段。ま。と神武天皇。卷。宇麻志麻遲命の処。お出さるを見るは。し。

夷鳥命 亦云天夷鳥命 亦云武 命 亦名武三熊命 熊出大人 此者出雲国造出雲臣土師連菅原宿禰秋篠宿禰島津国造武藏国造相摸国造大島国造伯



キノクニノミヤツコク、マノクニノミヤツコカミツウナカミノクニノミヤツコ  
者<sup>シ</sup>國造<sup>シ</sup>。菊麻國造<sup>シ</sup>。上海上國造<sup>シ</sup>。

シモツウナカミノクニノミヤツコア、ハノクニノミヤツコイ、ジムノクニノ  
下海上國造<sup>シ</sup>。安房國造<sup>シ</sup>。伊甚國

ミヤツコニヒバリノクニノミヤツコタカノクニノミヤツコトヨクニノミヤツコフタ  
造<sup>シ</sup>。新治國造<sup>シ</sup>。高國造<sup>シ</sup>。豐國造<sup>シ</sup>。二

カタノクニノミヤツコラ、ガ、オヤナリ、  
方國造<sup>シ</sup>。等出祖也<sup>シ</sup>。

武夷島命<sup>タケヒナドリノミコト</sup>。御名義<sup>ミナト</sup>。師<sup>シ</sup>云<sup>ク</sup>天日照<sup>ヒナゲリ</sup>とも申<sup>ス</sup>。此神  
天<sup>アメ</sup>と降<sup>リ</sup>て、邊鄙<sup>ヘノハ</sup>を平<sup>ム</sup>とす<sup>ル</sup>功<sup>イサメ</sup>あり<sup>シ</sup>。其功<sup>イサメ</sup>の事<sup>コト</sup>を御

名高<sup>ナガク</sup>れ<sup>ド</sup>。其功<sup>イサメ</sup>を美<sup>メ</sup>て<sup>シ</sup>。鄙照<sup>ヘテリ</sup>と稱<sup>ナ</sup>し<sup>テ</sup>ある<sup>ル</sup>。照<sup>テリ</sup>を登<sup>ノボ</sup>理<sup>リ</sup>  
も、万葉十四<sup>マンヤクシヨウ</sup>日之照<sup>ヒノテリ</sup>者<sup>モノ</sup>。ちて比良島<sup>ヒラシマ</sup>とも云<sup>ハ</sup>。比良<sup>ヒラ</sup>を比

を、比賀<sup>ヒカ</sup>刀禮<sup>タテマツル</sup>婆<sup>ハ</sup>とを免<sup>メ</sup>り。那<sup>ナ</sup>を良<sup>ヨシ</sup>とを横<sup>ヨコ</sup>通<sup>トウ</sup>音<sup>ネ</sup>あり<sup>シ</sup>。歎<sup>イハ</sup>辞<sup>ハ</sup>の阿<sup>ア</sup>那<sup>ナ</sup>を  
那<sup>ナ</sup>の轉<sup>マシ</sup>れる<sup>ル</sup>。よて、那<sup>ナ</sup>を良<sup>ヨシ</sup>とを横<sup>ヨコ</sup>通<sup>トウ</sup>音<sup>ネ</sup>あり<sup>シ</sup>。阿<sup>ア</sup>良<sup>ヨシ</sup>といふも

此例<sup>コノタトヘ</sup>あり<sup>シ</sup>。ちて天<sup>アメ</sup>を阿<sup>ア</sup>麻<sup>マ</sup>能<sup>ノ</sup>を訓<sup>ナ</sup>べし。其<sup>コノ</sup>を下<sup>シ</sup>小<sup>コ</sup>舉<sup>ト</sup>る<sup>ル</sup>。阿<sup>ア</sup>麻<sup>マ</sup>能<sup>ノ</sup>  
比<sup>ヒ</sup>奈<sup>ナ</sup>等<sup>トウ</sup>理<sup>リ</sup>神<sup>カミ</sup>社<sup>ヤ</sup>。ま<sup>と</sup>竟<sup>ハ</sup>宴<sup>ユキ</sup>歌<sup>カ</sup>。得<sup>エ</sup>天<sup>アメ</sup>穗<sup>ホ</sup>日<sup>ヒ</sup>命<sup>ノミコト</sup>。學<sup>マカ</sup>生<sup>シ</sup>蔭<sup>カゲ</sup>孫<sup>ムコ</sup>矢<sup>ヤ</sup>田<sup>タ</sup>

部<sup>ベ</sup>、宿禰<sup>スネ</sup>公<sup>キミ</sup>望<sup>ノゾミ</sup>作<sup>シ</sup>歌<sup>カ</sup>。阿<sup>ア</sup>磨<sup>マ</sup>能<sup>ノ</sup>褒<sup>ホ</sup>臂<sup>ヒ</sup>俄<sup>カ</sup>彌<sup>ミ</sup>農<sup>ノ</sup>美<sup>ミ</sup>飫<sup>オ</sup>野<sup>ノ</sup>簸<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>く<sup>と</sup>  
ある<sup>ル</sup>を。以<sup>テ</sup>て證<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>。○武<sup>タケ</sup>三<sup>サン</sup>熊<sup>クマ</sup>命<sup>ノミコト</sup>。武<sup>タケ</sup>三<sup>サン</sup>熊<sup>クマ</sup>之<sup>ノ</sup>太<sup>タ</sup>人<sup>ヒト</sup>。三<sup>サン</sup>熊<sup>クマ</sup>を

式<sup>シキ</sup>。出<sup>デ</sup>雲<sup>クモ</sup>國<sup>クニ</sup>意<sup>イ</sup>宇<sup>ウ</sup>郡<sup>ノ</sup>。熊<sup>クマ</sup>野<sup>ノ</sup>坐<sup>イマス</sup>神<sup>カミ</sup>社<sup>ヤ</sup>。此<sup>コノ</sup>地<sup>チ</sup>名<sup>ナ</sup>を依<sup>ヨ</sup>れる<sup>ル</sup>  
御<sup>ミコト</sup>名<sup>ナ</sup>あり<sup>シ</sup>。さ<sup>は</sup>は<sup>は</sup>を彼<sup>カノ</sup>地<sup>チ</sup>名<sup>ナ</sup>を三<sup>サン</sup>熊<sup>クマ</sup>野<sup>ノ</sup>とも云<sup>ハ</sup>を思<sup>シ</sup>ふ<sup>ル</sup>。ま

と武<sup>タケ</sup>三<sup>サン</sup>熊<sup>クマ</sup>と云<sup>ハ</sup>を思<sup>シ</sup>ふ<sup>ル</sup>。若<sup>ニ</sup>く<sup>も</sup>を其<sup>コノ</sup>健<sup>ケン</sup>き<sup>キ</sup>残<sup>ノコ</sup>美<sup>メ</sup>て<sup>シ</sup>稱<sup>ナ</sup>し<sup>テ</sup>も



有べし。お布此神の御名を多加るはと式よ。因幡国高草

郡よ。天穗日命神社。お此御社の事天日名鳥命神社。阿太

賀太都健御熊命神社。賀下の太字祕貞觀七年六月。因幡

国無位。阿太賀都建御熊神授。從五位下。と国史小見也。ま

と式よ。出雲国出雲郡。阿麻能比奈等理神社あり。文徳天

皇紀よ。天安二年三月。此處よ。在河内国。天夷鳥神授。從五

位下。ともあり。師云此神社を志紀郡道明寺村よ在。と云

郷こまあり。と云。ま。と。姓氏○出雲国造。ま。於天穗日命

の。此葦原中。国を言向。小天降。て。出雲よ。久留。坐。於。る。由。を。

下第一百四段。小見え。ま。と第一百六段。高皇產靈神の。經津主神し

て。大國主神。小勅。ふる。へ。る。御言。よ。汝之。應。住。天日隅宮者

今當供造云々。又當主。汝之。祭祀者。天穗日命也。とある。此

出雲国造。ま。と。大社の神主。と。る。起。あり。け。て。国造本紀よ。

出雲国造。瑞籬朝。崇神天皇の御代を云以天穗日命十一世孫。宇迦

都久怒定。賜。国造。と。見。え。と。れ。ど。も。此。時。始。て。此。姓。人。の。国

造。と。あ。れ。ゆ。ふ。は。非。也。此。を。兄。を。誅。て。弟。の。家。を。国造。よ。定

賜。を。云。る。れ。る。ま。と。彼。卷。六十年の処ふ。云。ふ。が。如。く。小。て。此。姓

人。の。ま。此。国造。よ。し。こ。ま。は。皇美麻命。此。天降。坐。る。時。よ

と。れ。る。事。を。上。小。引。る。文。小。て。明。け。し。書紀。よ。天穗日命。是

出雲臣等。祖也。ま。と。姓氏錄。左京神別よ。出雲宿禰。天穗日命。子。



天夷鳥命之後也。此姓人の宿祢とありし證まゝ出雲臣

天穗日命五世孫久志和都命之後也。或人云出雲臣系國

命子津狹命子櫛尾前命子櫛形命とありしと右京出

雲臣天穗日命十二世孫鵜濡淳命之後也。此命の事跡を

十年の処山城國まゝ出雲臣天穗日命子天日名鳥命之

後也。まゝ出雲臣同天穗日命之後也。まゝ河内國神別小出

雲臣天穗日命十二世孫宇賀都久野命之後也。まゝあり

けり文武天皇紀ふ。大寶二年九月。從五位下出雲伯賜臣

姓とあり。此まの氏人子臣姓を賜へることの紀り見え

る始あり。けり桓武天皇紀ふ。延曆十年九月。近衛將監

正六位下出雲臣祖人言臣等本系出自天穗日命十四世

孫曰野見宿禰野見宿禰之後土師氏人等或爲宿禰或賜

朝臣臣等同爲一祖之後獨漏拘養之仁伏望與彼宿禰之

族同預改姓之例於是賜姓宿禰とあり。其後まゝ朝臣小

爲しあり。朝臣姓を賜へること史ふ漏とれど。続後師

云抑此姓此もと臣此尸ありしも彼國をゆ上りて朝廷

小仕奉しとて始まき依れるはし。此姓人の始て京に移

世野見宿禰あり凡て臣の尸ある姓を朝廷小親く仕奉る輩れり。大此事後よくはしく云けり後小

宿禰小も朝臣小もあまざるれ也。諸氏も此さて然京此あ

る也。小住るもばと國小住るも皆その本を國造とて出



と依子孫ある故也。古事記には其本小就て国造と何げ。  
冷云此史子出雲国造と書紀小ハ廣く渾て臣之舉と也。記るハ此小依れるあり。  
諸氏小此例多し。倣て知べし。侍て延暦十七年三月廿九日太政官符小昔者国造と郡領と別ありしを慶雲三年を以てして出雲国造小意宇郡大領を帯て米りる字ま旧例の如く国造と郡領と別小任せられ侍て今世はて。国造此残れる也。此国造紀、  
国造のみふて。中よも此国造名高し。此二国造は昔々ゆ  
他小異ふ也。貞觀儀式小此を任て儀を載られと  
也。○土師連。姓氏錄山城国。土師宿禰天穗日命十四世  
孫。野見宿禰之後也。和泉国神別小も二はと津国神別。土  
師連。天穗日命十二世孫。飯入根命之後也。まと大和国神別

小土師宿禰天穗日命十二世孫。可美韓飯根命之後也。山城  
神別小もと何也。さて飯入根命。可美韓飯根命ハ。同人小  
也。崇神天皇卷小。飯入根命ハ。宇迦都久怒命の父あると  
也。見えぬれ也。野見宿禰在。宇迦都久怒命此子ありと也。  
是也。穂日命十四世孫。侍て野見宿禰の京小移て仕奉  
まおとを。垂仁天皇卷。七年の處小見えて。彼當麻。蹶速て  
於あつ。同御世三十二年。皇后比婆須比賣命の薨坐る  
始あり。同御世三十二年。皇后比婆須比賣命の薨坐る  
時小。土師部を領て。主人形を造也。生人を殉ふ小更とり  
也。處也。天皇賞稱野見宿禰之功云。任土部職改本姓謂  
土師部臣是土師連等。主天皇喪葬之縁也。其野見宿禰者。







種あるなり。外大和国神別ノ贊土師連と云ふあり。此

姓の事ニ雄略天皇卷ノ見えとる。彼ニ注

ふべ。○菅原宿禰ノ姓氏録右京神別菅原朝臣土師宿禰同祖

乾飯根命七世孫。大保度連之後也。とある。依て記せり。

但し本書ノ朝臣とあるを。侍て此姓を賜テるニは

宿祢と記るニしテ下ニ云。光仁天皇紀ノ天應元年六月。遠江介從五位下土師宿禰

古人云く。十五人言。土師之先。出自天穗日命。其十四世孫。

名曰野見宿禰。昔纏向珠城宮御宇。天皇代云く。率土師三

百餘人。自領取埴造諸物象。進之以代殉人云く。望請。因居

地名。改土師。以為菅原姓。勅依請許之。と見也。古人の事。大

介從五位下侍読天應元年賜菅原姓菅原院以儒行菅原

は。大和国添下郡。ある地名なり。垂仁天皇陵のあり地

なり。信友云。和名抄ノ此郷名なり。れど。天平二十一年の

法隆寺資財帳ノ添下郡菅原郷ノあり。まニ古ノ郷ノあり

り。むニまニ後大和風土記ノも。此天皇を。此地ノ葬奉れ

添下郡菅原郷とありと云ゆ。る事ハ。彼御卷の末ノ見えとる如く。みて。此地ノ土師氏

の住ルことハ野見宿禰也。此大御葬の事を主トなり。む

グ。大御心ノか。子依臣ノありしノを。やぐて御陵の邊ニ

住せ給ひテ依ぞ。始ニあり。む。然レまニ土師氏ノ多クあり。中

ふ。古の菅原郷ノ住ルグ。嫡家ノあり。菅原姓を奏請ト依。遠

江介古人宿禰ノ其家ノあり。む。かニ古ノ土師氏ノ嫡家



社あり。此を古の姓人此氏神あるは。今菅原村と云ふ。在て菅原天神と稱ふと帳考ふ云ゆ。まよ或説ふ遠江國長上郡菅原郷。今菅原天神社ありて天神町と云ふ。こを古人の遠江介と云ふ。時の居地。後大和風土記。添下郡菅原郷云く。傳云。此地菅原氏始祖所出也。故以菅原爲氏也。とあり。地。あふ此。垂仁天皇卷の末。○秋篠宿禰。此を姓氏録に。上は菅原朝臣の次ふ出で。同上とあり。して此姓を賜へる事を。桓武天皇紀に。延暦元年五月。土師宿禰安人等言臣等遠祖野見宿禰云く。土師宿禰古人等。前年因居地名改姓菅原。當時安人任在遠國。不及預列。望請土師之字。改爲秋篠。詔許之。於是安人兄弟男女六人。賜姓秋篠。とあり。此文の趣を見

る。土師姓を改ま欲し。その根此卑。して菅原。く聞ゆる字忌てありけむと思は。あり。姓秋篠姓ともふ。土師姓ありし時と。宿禰の尸カキあり。うば。菅原姓秋篠姓と爲ても。尸をふ本此は。宿禰よ。て有しを。そを。上引る文ども。改土師以爲菅原姓と。云。賜姓秋篠とのみ有て。尸を云ざるを思へし。桓武天皇紀に。延暦九年十二月。菅原宿禰道長秋篠宿禰安人等。竝賜朝臣と有て。是を朝臣の尸とあまし。尸。故この史に。本よ就て菅原宿禰。秋篠宿禰と記せるあり。○嶋津國造。此を國造。本紀に。嶋津國造志賀高穴穗朝。出雲臣祖佐比禰足尼孫。出雲笠夜命。定賜國造。とある。よ依て記せ。して嶋津國。とは。即志摩國これあり。此國の事。第四百四十一段。島。之速贊。此處よ委く注べし。○



武藏<sup>ムサシ</sup>圀造。古事記書紀に依て記せ。圀造本紀にも  
出雲臣の裔ある由見えたり。○相摸<sup>サガム</sup>圀造。古事記書紀に  
紀ふ。相武<sup>サガム</sup>圀造志賀高穴穗朝御世。武刺<sup>ムサシ</sup>圀造祖神伊勢都  
彦命三世孫。弟武彦命定賜<sup>サガム</sup>圀造とあるに依りて記せ。○大嶋<sup>オホシマ</sup>圀造。此に圀造本紀に。大嶋<sup>オホシマ</sup>圀造志賀高穴穗朝御  
世无邪<sup>ムナシ</sup>志<sup>シ</sup>圀造同祖。兄多毛<sup>タケケ</sup>比命。此命の名を延佳も師も  
り。上より引る文に。弟武彦と云名。エタモヒと訓るハ非あ  
る。對する名おれむ。かく訓べし。兄穴倭古命定賜<sup>ムナシ</sup>圀造と  
あるに依りて記せ。けり。大嶋<sup>オホシマ</sup>圀造とは。和名抄に。周防<sup>スヘ</sup>圀造  
嶋郡とあるに依り。○伯耆<sup>ハクキ</sup>圀造。此に圀造本紀に。伯耆<sup>ハクキ</sup>圀造  
造志賀高穴穗朝御世。牟邪<sup>ムナシ</sup>志<sup>シ</sup>圀造同祖。兄多毛<sup>タケケ</sup>比命。兄大

八木<sup>ヤギ</sup>足尼<sup>タニ</sup>定賜<sup>サダタマヒ</sup>圀造とあるに依りて記せ。○菊麻<sup>キクマ</sup>圀造。古  
は圀造本紀に。菊麻<sup>キクマ</sup>圀造志賀高穴穗朝御代。无邪<sup>ムナシ</sup>志<sup>シ</sup>圀造  
祖。兄多毛<sup>タケケ</sup>比命。兄大鹿<sup>オホカ</sup>圀造直定<sup>ナオサだ</sup>賜<sup>タマヒ</sup>圀造とあるに依りて記せ  
。けり。○上海<sup>カミウツナカミ</sup>圀造。此に古事記に依りて記せ。けり。上  
れあり。○上海<sup>カミウツナカミ</sup>圀造。此に古事記に依りて記せ。けり。上  
海上<sup>ウミノ</sup>圀造とあり。和名抄に。上總<sup>カミノ</sup>圀海上<sup>ウミノ</sup>。加美<sup>カミ</sup>郡とあるに依りて記せ。○下海上<sup>シモウミノ</sup>  
あり。右七圀の事。まゝ其圀造とちの由縁あり。○下海上<sup>シモウミノ</sup>  
圀造。此も古事記に依りて記せ。圀造本紀にも。下海上<sup>シモウミノ</sup>圀  
直定<sup>ナオサだ</sup>賜<sup>タマヒ</sup>圀造とあり。けり。下海上<sup>シモウミノ</sup>圀  
海上<sup>ウミノ</sup>。加美<sup>カミ</sup>郡とあるに依りて記せ。○安房<sup>ヤシノ</sup>圀造。古事記書紀に  
加美<sup>カミ</sup>郡とあるに依りて記せ。○安房<sup>ヤシノ</sup>圀造。古事記書紀に



小阿波国造志賀高穴穗朝御世天穗日命八世孫彌都侶  
岐命孫大伴直大瀧定賜国造とある小依て記せ也。阿波  
房国伊甚国造。古事記小依て記せ也。国造本紀子  
志賀高穴穗朝御世安房国造祖伊許保止。伊甚国造  
命孫伊己侶止直定賜国造と見えたり。伊甚国造  
と和名抄子上總国夷瀧伊志郡とあ依此あり。○新治国  
造は国造本紀小志賀高穴穗朝御世美都呂岐命兒比奈  
羅布命定賜国造とあり。美都呂岐命天穗日命八世孫  
と見也さて兒字は裔の義あり  
即今此常陸国新治郡あり。風土記云或曰倭武天皇巡  
狩東夷之国幸過新治之縣  
所遣国造毘那良珠命新  
令掘井云くと見也○高国造也。此も国造本紀子志  
賀高穴穗朝御世彌都侶岐命孫彌佐比命定賜国造とあ

也。今此常陸国多珂郡是あり。風土記云古老曰斯我高穴  
穗宮大洲照臨天皇之世以建御狹日命任多珂国造。今云  
弥佐  
比命建御狹日命字ハ替茲人初至歷驗地體以爲峯險岳  
崇因名多珂之国。謂建御狹日命者即出雲臣同属今多珂  
石城所謂是也とありさて同記よ古昔  
自相摸国足柄岳坂以東諸縣摠称我姬国是當時不言常  
陸唯称新治筑波茨城那賀久慈多珂国各遣造別令檢校  
其後至難波長柄豊前大宮臨軒天皇世遣高向臣云々等  
摠領自坂已東之国于時我姬之道分為八国常陸国居其  
一矣とあり新治以下六国。○豊国造。古は国造本紀小志  
賀高穴穗朝御代伊甚国造同祖宇那足尼定賜国造とあ  
る小依て記せ也。古て豊国造の事也。上第八段。小委々注ゆ也。  
此も分らぬ事あり。○二方国造。此も国造



本紀子。二方国造志賀高穴穗朝御世。出雲国造同祖。遷伯  
 一奴命孫美尼布命定賜国造とあるに依て記せば。古て  
 二方国造と和名抄に。但馬国二方郡とあるこれあり。上  
 安房以下六国ノ事まゝ其国造とちノ事  
 也。成務天皇卷五年此処に委く注ふべし。

次天津日子根命出兒天麻比

止都根命。亦云天目。亦名天久。

斯麻比土都命。亦云天久。亦名

天出御影命。亦云明立。亦名天

戸間見命。故是天津日子根命

者。犬上縣主蒲生稻置菅田首。

桑名首額田部連額田部湯坐

連。三枝部造高市縣主奄智造。



凡河内国造。凡河内直津国造。

山背国造。山背直磐城国造。磐

瀬国造。菊多国造。周淮国造。馬

來田国造。師長国造。茨城国造。

周防国造等出祖也。

天麻比止都根命。天目一箇命。天久斯麻比土都命。御名義。麻比止都。目一箇とも書る字此意也。此神を御日の一教坐ましけるお依也。伊勢の多度神社の枝社に坐此神あり也。申根を例の稱言也。故畧死てふも麻比土都と耳も申せぬ也。意も麻比土都祢を真一根のるよぐひの美称うとも思へどさる意あらむも根を畧死て云まじぬれぬ目一箇の意あるべし。○天久斯麻比土都命。天久之比命。名義久斯も久之比も同言ふて奇靈の意あるよと土ふ云依が如也。○天之御影命。明立天御影命。御名義いまだ思得ざれど。但し明立を言ある仲哀天皇紀ある神の御語ふ。如天津水影押伏而



我所見<sup>ワガミル</sup>因<sup>ヲ</sup>云<sup>ク</sup>とあるを考合<sup>カ</sup>候<sup>キ</sup>。此事委<sup>レ</sup>クハ其御<sup>ミ</sup>天<sup>ノ</sup>

戸間見<sup>トマミ</sup>命<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>戸<sup>ノ</sup>を豊<sup>ニ</sup>間見<sup>ト</sup>味<sup>ヲ</sup>間見<sup>ト</sup>命<sup>ノ</sup>の間見<sup>ト</sup>同<sup>シ</sup>

其<sup>レ</sup>下<sup>ニ</sup>皇<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>注<sup>ス</sup>べし。○犬上<sup>ノ</sup>縣主<sup>ト</sup>を<sup>レ</sup>姓氏錄<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>定<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>

犬上<sup>ノ</sup>縣主<sup>ト</sup>天津彦根<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>之後也<sup>ト</sup>。とあるに依<sup>テ</sup>て記<sup>セ</sup>せり。但<sup>シ</sup>天津

彦根<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>之後<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>。其本<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>就<sup>テ</sup>て舉<sup>ル</sup>るに依<sup>テ</sup>て炳<sup>シ</sup>。け<sup>レ</sup>て犬上<sup>ノ</sup>を和

名抄<sup>ニ</sup>近江<sup>ノ</sup>因<sup>テ</sup>犬上<sup>ノ</sup>郡<sup>ト</sup>去<sup>レ</sup>れぬ。天武<sup>ノ</sup>天皇<sup>ノ</sup>紀<sup>ニ</sup>犬上<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>濱

見<sup>ユ</sup>。江左<sup>ノ</sup>三郡<sup>ノ</sup>録<sup>ニ</sup>と云<sup>フ</sup>。今<sup>ノ</sup>の万葉<sup>ノ</sup>十<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>。狗上<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>鳥

籠<sup>ノ</sup>山<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>も見<sup>ユ</sup>也<sup>ト</sup>。聖武<sup>ノ</sup>天皇<sup>ノ</sup>紀<sup>ニ</sup>も。さて神名式<sup>ニ</sup>同<sup>シ</sup>因<sup>テ</sup>野

洲<sup>ノ</sup>郡<sup>ト</sup>。御上<sup>ノ</sup>神社<sup>ト</sup>。名<sup>ノ</sup>神<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>。御社<sup>ト</sup>ハ。即<sup>チ</sup>天<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>御影<sup>ノ</sup>神

不<sup>レ</sup>坐<sup>レ</sup>ませ也<sup>ト</sup>。皇<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>委<sup>ク</sup>注<sup>ス</sup>べし。天<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>因<sup>テ</sup>彦根<sup>ノ</sup>と云<sup>フ</sup>處<sup>ニ</sup>あ

る。野洲<sup>ノ</sup>郡<sup>ト</sup>ありて。安河<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>川<sup>ノ</sup>のある如<sup>ク</sup>と。悉<sup>ク</sup>天津<sup>ノ</sup>日子

根<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>由<sup>レ</sup>縁<sup>ノ</sup>ある事<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>。○蒲<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>稻<sup>ノ</sup>置<sup>ト</sup>。依<sup>テ</sup>て古<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>記<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>師<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>。

和名抄<sup>ニ</sup>近江<sup>ノ</sup>因<sup>テ</sup>蒲<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>郡<sup>ト</sup>これあり。名<sup>ノ</sup>義<sup>ト</sup>を<sup>レ</sup>いと上<sup>ノ</sup>代

不<sup>レ</sup>蒲<sup>ノ</sup>の多<sup>ク</sup>生<sup>ル</sup>ぬ地<sup>ト</sup>也<sup>ト</sup>。蓬<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>浅<sup>ノ</sup>茅<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>麻<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>。お

智<sup>ノ</sup>天皇<sup>ノ</sup>紀<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>郡<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>見<sup>ユ</sup>。五葉<sup>ノ</sup>寺<sup>ト</sup>。蒲<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>野<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>。今<sup>ノ</sup>云<sup>フ</sup>天

るべし。温<sup>ノ</sup>故<sup>ノ</sup>録<sup>ニ</sup>と云<sup>フ</sup>。の蒲<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>野<sup>ト</sup>。宇<sup>ノ</sup>祢<sup>ノ</sup>野<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>。布<sup>ノ</sup>引<sup>ノ</sup>山

とも云<sup>フ</sup>。昔<sup>ノ</sup>より廣<sup>ク</sup>大<sup>ク</sup>し。近<sup>ノ</sup>因<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>双<sup>ク</sup>。あき野<sup>ノ</sup>山<sup>ト</sup>あり。此<sup>ノ</sup>姓<sup>ノ</sup>

ゆ。草木<sup>ト</sup>も生<sup>ル</sup>び立<sup>テ</sup>もそと。然<sup>レ</sup>荒<sup>ク</sup>野<sup>ト</sup>ありと云<sup>フ</sup>。へり。此<sup>ノ</sup>姓<sup>ノ</sup>

おとを。他<sup>ノ</sup>書<sup>ニ</sup>未<sup>レ</sup>見<sup>ユ</sup>。あたら<sup>シ</sup>に神名式<sup>ニ</sup>近江<sup>ノ</sup>因<sup>テ</sup>蒲<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>郡<sup>ト</sup>。

菅田<sup>ノ</sup>神社<sup>ト</sup>ありて。今<sup>ノ</sup>云<sup>フ</sup>。此<sup>ノ</sup>御社<sup>ト</sup>。今<sup>ノ</sup>桐<sup>ノ</sup>原<sup>ノ</sup>村<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>。在<sup>リ</sup>と帳

ぼ。姓氏錄<sup>ニ</sup>菅田<sup>ノ</sup>首<sup>ト</sup>。天<sup>ノ</sup>久<sup>ノ</sup>斯<sup>ノ</sup>麻<sup>ノ</sup>比<sup>ノ</sup>止<sup>ノ</sup>都<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>之後也<sup>ト</sup>。とあり。比<sup>ノ</sup>麻

止<sup>ノ</sup>都<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>。天津彦根<sup>ノ</sup>命<sup>ノ</sup>の。菅田<sup>ノ</sup>首<sup>ト</sup>。おは。姓氏錄<sup>ニ</sup>山城<sup>ノ</sup>因<sup>テ</sup>不<sup>レ</sup>。



菅田首天久斯麻比土都命之後也。とあるに依りて記せり。  
近江国蒲生郡小菅田神社ありて。桐原と云地を坐まし。  
其在麻比土都命あるはきま。と土に注せる如くあれ也。  
菅田と云を。桐原の舊名ありて。其をやうて氏より負て山城  
小移住るあるべし。諸氏より然る例式。播磨国加茂郡小  
菅田神社あり。此御社を。今賀東郡菅田村と云不在。と  
郷ありて。由は。同国多可郡小。天目一神社あり。ま  
郡小。天一神王神社と申は。もあり。此も目一箇命より由あり  
りて。おが。此社を。今東新宿村と云。在る。阿布良権現  
と称ふ。此。此も近江と云移せるあり。其在郡名  
を帳考ふ。云り。此も近江と云移せるあり。其在郡名  
を多可と云。彼国あり多何神社より由有て。たが。ま。ば

あり。○桑名首。此を姓氏録右京神別。桑名首。天津彦根命男。  
天久之比乃命之後也。とあるに依りて記せり。桑名を和名  
抄。伊勢国桑名久波奈郡あり。式小同郡小。桑名神社  
二座。此を天津日子根命と。天久之比乃命を祀れり。とぞ。  
ま。天野信景が。伊勢参道里程抄と云もの。今桑名町  
小。ある。春日社。式。桑名神社あり。社家説ふ。社内左  
を。三崎神社と号は。昔を。太夫村に在り。後。此より移り。今  
も。太夫村より。神輿昇人出るあり。建雷命。斎主。神右。春  
日。神社より。見屋根命。姫大神。奥の御前。母山神社  
と称して。地主の神。桑名。祠官郷司氏より。聞りと云  
此。説み。地主と云。彦根命。久之比。命。小坐。あるべし。ま  
。或説ふ。大夫村に在る。三島明神。即桑名神社あり。とも  
云。あり。同郡小。多度神社も有て。此を。上。云。依。如く。  
天津日子根命小坐まし。桑名。城より。三里。戊亥の方。多度  
村と云。坐。あり。ま。同郡小。



額田神社もあて此も此御社の傍小俗一曰連と稱は  
由あること上よ云り此御社の傍小俗一曰連と稱は  
社あて此を社傳ふ天麻比止都禰神ありと云信ふ然る  
べ天野信景ハ多度神社を以て多々あはと桑名神社  
小並て式小佐乃富神社あり此も目一箇命小由あると  
と景行天皇卷み注べし侍て久斯麻比土都命の御裔の  
桑名地小住て地名をやがて姓小負るぐ後よ右京小移  
正住るよそ有べきはと古語拾遺よ天目一箇命筑紫伊勢  
忌部と見えとる伊勢国忌部を此桑名首を云るふはの  
らざゆらまゐ筑紫忌部を更小考得交筑前国早良郡小  
額田郷あて去れもし由あたよや後人考考てと岡田勝海云肥

後園山鹿郡久原村と云外よ目神社と云古社あて神  
主帆足下総守清原惟香と云故翁門人あてと云り由あ  
りげあてと園造本紀よ天目一箇命とあて延佳額田  
其を誤ありと云て目一と書る中額田  
部連此に書紀よ天津彦根命此額田部連遠祖也姓氏録  
左京小額田部天津彦根命三世孫二字私加  
神別小額田部天津彦根命三世孫其本額田部河  
田連條よ三世尊あり伊賀高市連の処引る文彦伊  
賀都命とあても同人と聞えとる其処も三世孫と  
ありと意富伊我都命之後也あて何依て記せ也但  
天津彦根命と云ると其本を奉とあて実を天御蔭命  
とあり出るとと下よ引る文よ見えとる如し侍て意  
富伊賀都命ハ彦根命の三世孫侍て額田と云由は次小  
あまバ御蔭命よ孫ありなり侍て額田と云由は次小  
引る文小見也額田部湯坐連古事記よか師云姓氏録  
左京小額田部湯坐連天津彦根命子明立天御影命之後  
神別



也。今云御事紀は天并麻弥命の後あり由允恭天皇御世。  
 被遣薩摩国平隼人覆奏之日獻御馬一疋額有町形廻毛。  
 天皇喜之賜姓額田部也。奴加む郎比多比の云云町  
 毛ハ和名抄あり是もて額田此義解えよ。額田の田此義  
 都無之とあり。是非もて額田此義解えよ。額田の田此義  
 非あり。定額の額を奴ま同書河内国額田部湯坐連。  
 加と云べき由同。人田部連之後也。其も何。今云允恭  
 天津彦根命五世孫乎田部連之後也。其も何。今云允恭  
 世の額田馬を献れる。考ふは湯坐連の湯坐の  
 幾代の孫あり。此は考ふは湯坐連の湯坐の  
 事を垂仁天皇卷五集お注べし。此を由邪と訓む。右  
 此如く。額田部連とも何。湯坐連を其氏人此  
 中湯坐の事此由お付て。別賜を。姓あり。此

て後。湯坐連の方榮えて。廣うけける故。古事記おは  
 其を舉。此姓此人を孝徳紀。孝謙紀。仁明紀おども見  
 紀よを本を舉。額田部連の人を。凡て見え。書  
 邊郡額田邑。和名抄よ。平群郡額田。奴加多。○今此郡額  
 河内国河内郡額田おど何。されらは姓氏録の説此如  
 くは。此姓をり出。地名よ。凡て姓ま。人名とり出  
 疑。姓人の名。ま。神名式。伊勢国桑名郡額田神  
 社あり。今云和名抄よ。衆名郡額田沼加多と見え。神鳳抄  
 り。と帳考。同郡多度神を。此天津日子根命おれ。此社  
 も此姓お由ある。○三枝部造。依て古事記よ。姓氏録



大和國神別よ。三枝部連額田部湯坐連同祖天津彦根命十四

世孫建己呂命之後也。顯宗天皇御世諸氏賜饗醢于時宮

庭有二莖草獻之因賜姓三枝部造姓有て同じ故事を記

り。と何也。天武天皇紀云。十二年九月福草部造賜姓曰連

を見えたり。然るも此よ造と何るを本よ就て舉げり。勿

也。さて三枝のことと神武天皇卷云。三枝部の。高市

縣主。此は古事記よ。姓氏錄右京神別よ。高市連額田部同祖天

津彦根命三世孫彦伊賀都命之後也。此を上よ引る文よ。意富伊我都命と何

ると同人あるべき。はと和泉國神別よ。高市縣主天津彦根命十

四世孫建許呂命之後也。彦伊賀都命十を見え。さて高市

は。和名抄よ。大和國高市多介郡去れあり。此名の事云。雄

の御哥よ。多氣知と何る下。天武天皇紀云。高市郡大領高

市縣主許梅と云人あり。同卷云。十二年冬十月高市縣主

賜姓曰連を見え。○奄智造也。古事記よ。依師云。奄知也。阿

牟知と訓べし。和名抄よ。伊勢國郡よ。奄藝。今山邊郡よ。庵

治と云村あり。此あり。今あうちと唱ふるを伊勢の

郡と何りて。哥小扇よ。まよ靈異記よ。大倭國十市郡菴

知部と云何也。統紀廿五。はと卅六。豊野。さて姓氏錄大

別。神。奄知造天津彦根命十四世孫建疑命之後也。まよ

左京神。奄知造額田部湯坐同祖と何也。類聚國史弘仁十



知造吉備麻呂。○凡河内国造。此古事記に依て記せり。凡河内  
と云人見也。○凡河内国造。依て記せり。凡河内  
国とは。即河内国也。国号のあと及此氏人の国造と云  
此処に委凡河内直。此古事記に天津彦根命是凡河内直  
祖也。と見え。舊事紀に天御蔭命凡河内直等祖と云。然  
む此姓を日子根命の御子此中よ。毛と直の尸也。し。茂  
天御蔭命より出とるあり也。毛と直の尸也。し。茂  
天武天皇紀に十二年九月凡河内直賜姓曰連と見え。師云此氏人  
と十四年六月凡河内連賜姓曰忌寸と云。師云此氏人  
宿祢と云姓を賜し。ことと。続後紀に故姓氏録に。此姓三  
不見也。清内と云河内の縁あるべし。故姓氏録に。此姓三  
所津神別小出と云。何れも忌寸と云。凡河内忌寸天穗  
日命十三世孫可美乾飯根命之後也。古事記に凡河  
と一処あるを。決て混於る傳おらむ。古事記に凡河

内国造と云は。国造と云は。後を以て。擧げ書紀よ。凡  
河内直也。あは。姓の本小就て擧とる也。其此氏人  
造と云は。成務天皇の大御世に定給。○津国造。姓  
るあるを。尸を元より負るも。此かまむれ也。○津国造。姓  
氏録。天津彦根命。男。天戸間見命之後也。と  
見也。○山背国造。古事記に依て記せり。但し本に代と云  
山背ハ即山城也。名義を。師説小。山背と書る字の意  
字を省く。あるは。此国を。大和国の北方に。山の後か  
むれ也。延暦十三年十一月詔に。此国山河襟帶自然作城  
因斯形勝可制新號。宜改山背国爲山城国云。古事記に  
見也。古事記に。天津彦根命。是山背直祖也。と云。も



直此加婆禰おてしを。天武紀ふ。十二年九月。山背直賜姓。姓曰連。十四年六月。山背連賜姓曰忌寸。とあり。姓氏錄山城國神別ふ。山背忌寸。天都比古禰命子。天麻比止都禰命之後也。と見也。今云。國造本紀初の処。子。檀原朝。御世。以。天。日。一。命。為。山。代。國。造。即。山。代。直。祖。と。ある。を。誤。あり。其。を。姓氏錄。天。麻。比。止。都。禰。命。之。後。也。と。云。ふ。と。時。代。續。紀。の。い。と。く。違。へ。る。を。思。ふ。べ。し。お。下。よ。云。を。見。も。續。紀。の。山。背。國。造。山。背。忌。寸。品。遲。と。云。人。見。也。續。後。紀。ふ。天。長。十。年。山城國入。山代忌寸淨足。同姓五百川等八人。改忌寸。賜宿禰。淨足等。天津彥根命之苗裔也。と見也。や。あり。け。て。姓氏錄津國神別ふ。山直。天御影命十一世孫。山代根子之後也。と見え。と。依。を。書。紀。ふ。天津彥根命。山背直祖也。と有。と合せて

思ふ。此を山代直あるが。代字此脱と依ありなり。其を山代根子てふ名も。彼國よ由ある名あるをや。斯てま。上。引。る。山。背。忌。寸。條。ふ。天。都。比。古。禰。命。子。天。麻。比。止。都。禰。命。と。何。依。を。以。て。見。れ。む。天。麻。比。止。都。禰。命。を。天。御。影。命。と。一。神。を。あ。ま。と。明。け。し。此。を。師。も。既。く。お。下。思。ひ。證。は。べ。き。然。言。れ。と。り。き。事。の。多。か。依。次。く。ふ。云。ふ。を。見。る。は。し。續。後。紀。よ。承。和。六。年。十。一。月。左。京。人。山。直。池。作。等。十。人。改。直。賜。宿。禰。池。作。之。先。出。自。天。穗。日。命。之。後。と。ある。姓。ふ。と。別。姓。あり。或。人。お。ま。を。引。て。津。國。神。別。よ。見。元。と。依。天。御。影。命。と。額。田。部。湯。坐。連。條。よ。天。津。彥。根。命。子。明。立。天。御。影。命。を。何。る。を。別。神。あり。と。云。へ。ま。ど。非。あり。此。を。明。立。て。ふ。こ。の。無。き。お。依。て。れ。る。は。れ。む。正。し。く。明。立。天。御。影。命。の。お。ま。を。古。事。記。よ。も。舊。事。紀。よ。も。多。く。天。御。影。命。と。何。る。字。や。○磐城國造。こは國



造本紀よ。石城、圀造、志賀、高穴穗朝御世、以建許呂命、定賜、  
圀造とある。小依て記せ也。建許呂命、天津彦根命十四世孫あること、上よ引る姓氏  
録よ。磐城、和名抄、陸奥、圀磐城郡、とある。よきあり。○  
磐瀨、圀造、よは、圀造本紀よ。石瀨、圀造、志賀、高穴穗朝御世、  
以建許侶命、兒建彌依米命、定賜、圀造とある。小依て記せ  
也。磐瀨、和名抄よ。陸奥、圀磐瀨郡、とあり。此二圀の事  
卷よ、委く。注べし。○菊多、圀造。こは、圀造本紀よ。道、奥、菊多、圀造、輕  
島、豐明、御代、以建許呂命、兒屋主乃禰、定賜、圀造とある。小  
依て記せ也。菊多、和名抄よ。陸奥、圀菊多郡、これあり。此圀  
の事  
也。應神天皇、卷よ、委く注べし。けりて建許呂命、也。も、近江、小住、也しを召

きて道、奥、小任、されし也。所思、く、彼、圀、よ、由縁、ある事、と  
も、此、彼、あり。其、たま、抄、神名式、よ。陸奥、圀名取郡、多可神社。  
宮城郡、多賀神社。和名抄よ。多賀郷もあり。行方郡、多珂神社。和名抄よ。多珂郷も  
あり。あ、あ、る、也。決、く、近江、圀犬上郡、よ、坐、ま、後、多何神社、を、移、れ、  
齋、へ、る、あ、ゆ、べ、く、は、と、名、神、祭、式、よ。川田神社、二座、御上、神  
社、一、座、と、見、え、と、る。共、小、近江、圀、あ、在、る、社、あ、て、中、よ、も、御  
上、神社、也。天、之、御、影、命、よ、坐、て、此、姓、人、の、祖、神、あ、る、と、事、上  
よ、云、る、如、く、あ、ま、也。彼、圀、よ、移、也、住、て、後、も、祭、る、は、き、謂、ふ  
也。然、る、よ、神、名、帳、よ。此、二、社、の、名、此、見、え、さ、る、を、移、して、後  
彼、圀、の、名、神、の、社、よ、決、て、此、二、社、あ、る、は、し、け、り、て、名、神、祭、式  
よ、ハ、本、此、稱、を、以、て、祭、ら、れ、し、が、其、ま、く、お、傳、ハ、ま、る、あ、ら



む然るを或写本此二社を奉ざ依むさ本の由縁を辨へざる後世人の此を近江に在る神社名あるを以て陸奥国の名神と載るを誤あるべし。又、依て道奥を猛き思ひてさあしらす除ける依縁は。夷ども此仇をむ因依故に其を鎮免むとの御心まて。建許呂命を任心給へる依縁は。此命此雄をむかひけむこそ。建許呂と云ふて炳くは。と下引る風土記の傳此趣ふても。息長帯比賣命に仕奉れと云は。彼韓を征み幸行せる時。從牙給へるを云りや聞ゆま。あて。ま按ふ此因の伊達郡も建の意からむも知べのらに建を多氏と云む。五十猛神を伊植神と云ひ。建部を多氏部と云を思ふべし。○周准因造。おろ因造本紀。須惠因造。志賀高穴穗朝。茨城因造。祖建許侶命。兒大布日意彌命。定賜因造。と

あて。同書よ。此郡も額田郷湯坐郷。依て姓氏録津田郡。あて。使主天津彦根命。子彦稻勝命。之後也。末字本も未と作る。ゆと云るぞとき一本まご拾芥。と見えあるを由有げあ抄よ。米とあるも誤字あるべし。但し彦稻勝命を。日子根命の御子を申は。外小所見とる事。れく。いせおぶあうれし。此を彦伊賀都命を訛め。て。天津彦根神の御子と爲とる。よは非ざ依り。彦伊賀都彦根命三世孫あるこそ。高市縣主。馬來田因造。事記よ。の処よ引る。姓氏録の文小見也。依て記。師云。和名抄よ。上總因望多。郡とあて。万葉十四。上總因歌。宇麻具多能禰呂とを免る地あり。末宇多と



ハ後よ訛シ書紀廿八ハ。大伴連馬來田といふ人名を九卷小カ望多ウキダと作シ。宇麻具多ウマキタと唱へしことを知シ。繼體天皇の御子ハ馬來田皇女ミコノ申去シ有リ。見ル也。造本紀ハ馬來田圀造志賀高穴穗朝御世茨城圀造祖建許呂命兒淡河意彌命定賜圀造。○師長圀造此ハ圀造本紀ハ師長圀造志賀高穴穗朝御世茨城圀造祖建許呂命兒意富オホホ鷲ワレ意彌オミ命定賜圀造とあるハ依テ記セ也。師長圀造和名抄ニ相摸圀餘綾郡磯長郷ニ也。度會延經ノ言依ハさル也とレ也。○茨城圀造ハ書紀ハ天津彦根命此茨城圀造遠祖也とあるハ依テ記セ也。別ニ也。姓氏錄和泉圀造天

津彦根命之ノ後也と見ル也。茨城ハ和名抄ニ常陸圀茨城ハ良岐郡これ也。師云和名抄ニ牟婆良岐とあれども本ハ宇婆良ある也。梅馬ハあざをモ後ハ牟米牟麻と云フとぐひも此も後ハ牟とモありシ也。和名抄ニ菟ウ菟ウをモ於保宇波良とありシ也。云フれしハ依テ宇婆良伎と訓ス也。常陸風土記ハ茨城圀造祖多祁許呂命仕息長帶比賣天皇之朝當至品ニ太天皇之誕時多祁許呂命有子八人中男筑波使主茨城郡陽生連等之祖と見え。圀造本紀ハ茨城圀造輕嶋豐明朝御世天津彦根命孫筑紫刀禰定賜圀造とあるハ合せて思フ也。筑紫刀禰ハ多祁許呂命の子也。風土記ハ筑波使主とあるハ同人也。聞ク也。云フ。筑波使主云くと云フハ依テ思フ也。圀造本紀ハ筑紫刀禰とあるハ筑波刀禰を誤ルるハとも思フへど古語拾遺ニも天目



一箇命筑紫忌部といふ事の有れば筑波を誤れるは  
よむ非交加よくよ筑紫を負ふことはいふらして  
三代實錄ふ。仁和三三年三月常陸圀正六位上菅田神從五  
位上と見え和名抄ふ。同圀河内郡ふ菅田郷あり。然れど  
菅田神ハ茨城圀造の祖神と記さるよそ有べきはと郡  
名を河内と云も凡河内直より分けて此地の圀造とあ  
れる由縁あるは。○周防圀造。○周防圀  
造。此を古事記ふ。周防圀造輕嶋豐明朝茨城圀造同祖加  
依て記せり。米乃意美定賜圀造とあり。此圀の熊毛郡ふ石城神社と  
造ありしよ由あり。○右件く見えたる稻置直縣主首連  
きり尋ぬべし。臣圀造ふどの尸此事を此よ取總て言むといは其をまぢ

稻置直。まよ稻寸とも書り置は於伎の於を省て取れ也。  
日置王置あどの例あり但し此字字書く由を下  
云。もとハ職號ハ尸しぐ姓ふあまゆしあり其を成務天  
皇卷五年。ふ縣邑置稻置とあり。此稱の史よ見えたる  
始ふて名義ハ彼處ふ云如く諸圀ふある屯倉。此を稻を  
積置所あり。垂仁天皇卷廿七年の処よ委く注ふべし。此司をいして其事ふあぢる謂  
ふ依て。稻君と云意ハ稱ある哉其意を得て。稻とは書依  
ハらむ。師も既に置を君あり。○直は師説ふ。書紀ふ。阿多  
比延と訓る所あり。皇極天皇の卷。和名抄。和泉圀和泉  
郡の郷ふ山直也。多倍。やあるとを合せて。阿多閉と訓べし。  
か此阿多比延の比延を切めて閉と云あり。山直は此  
を山の末ふ阿韻ある故ふ。阿を畧きて多閉あり。此



尸も凡て固く此處に小ある姓小附されむ。其處の君と  
る意小ては有るやとあり。今云姓氏録に直者謂君也と  
詔可就て注せる文ありまども。侍て名義を師はいまど考  
意を師説よとく加れへり。大兄少兄あどの例此稱  
云と。試み直兄小は阿らぢる。号あり延を兄あるべし  
とばりり。師も其を常言ふ物の替を出はまを阿多  
既く言れと。阿多。其を常言ふ物の替を出はまを阿多  
比をも此處に云を按ふ。天皇命に御手小代て地を治  
むる由ふて直兄と稱ふ。依號に記し。尸をば爲れるあ  
らむ。續紀廿八。庚午年。籍小直。姓小費。字を書きとり  
故あらむ。も。有し由見え。とるも言義の代の意ある  
與とも義通ふ。阿多。○縣主は其縣く。此主に記。縣のあ  
とは。成務天皇卷五年。小出於其處。云。ば。し。け。て。此。め。固

固小在る縣を掌る者此號に記し。其職を子孫世々小  
傳る故小。即某縣主と云。尸をありしに記。○首を師云。意  
毘登を訓べし。元明紀。大津連意毘登と云。人名を元正  
も。忌部首。讀於。此はも。尊稱。小。て。大人の意あるべし。首  
比止とあり。意宇登をよむ。音。と言。ま。し。を。然。る。あ。と。ふ。て。尊。み。て。人  
を意毘登と云。し。大。を。は。允。恭。天。皇。卷。小。首。也。余。不。忘。と。言  
る。あ。と。此。阿。る。此。正。し。き。證。あり。け。て。此。尸。も。忌。部。首。物。部。  
首。海。部。首。形。部。首。鵜。甘。部。首。れ。ど。の。と。ぐ。ひ。某。部。と。云。姓。小  
多く。は。と。部。と。云。ぬ。も。多。く。は。部。に。有。る。べ。き。諸。姓。小。負。る  
を思ふ。其部を統領する首と云義の尸あり。然れど桑名



首を古語拾遺に天目一箇命者伊勢国忌部祖と云る哉  
合せて思ふに麻比止都禰命の御裔也鍛冶部を統領り  
て桑名不在し字伊勢国忌部とも桑名首とも云しあら  
むら。○連を師云牟良自と訓む群主の意ふて其群の中  
此主と云意あり。あの説委くハ第二十五はる大抵諸此  
姓の中ふ臣と連とは京此何と云ふ住居て殊不親く朝  
廷に仕奉る氏に此尸あり。雄略紀遺詔に臣連伴造毎日  
朝參國司郡司隨時朝集と何  
るも臣連伴造を京近く住居故あり。○今云古書に凡て  
臣連と序て大臣と大連と並ぶるも自らふ大臣を高く  
大連をいささ下れる状ふ。○臣を意美と訓むはて意  
見也まば此に挙るあり。師説に大身の意みて此を朝廷に仕奉る  
美てふ言義也。人を傍よ正等み云称あり朝廷に仕奉る

人あるを以て臣字を書かまじと君に對へて云臣の意あり  
を何ら交君に對へて云ふ臣を夜都古と云て書紀ありと  
言ま然訓りて書紀其不古書ふ。い於も臣連と對へ云  
て伴男を持分くを連を群主の意よて其群の中此主と  
云意ありを成合て思ふに大持てふ言此約ま依よて。毛  
を美ともとは部を統持於意の稱號なりしに尸をたま  
切まる。此を前思へて此はもと出雲臣に起れる稱  
るあらむ。此を前思へて此はもと出雲臣に起れる稱  
号あり。其を上に引る天神の大國主神に勅給へ依大  
詔命に當主汝祭祀者天穗日命是也と有てこま出雲國  
造まに大社の神主と起る。中臣の取持てふ言  
の約に依るを合せて按ふに穗日命以來その御裔  
此大社の神主とて大社の神に御前の事執持て仕奉  
る職業ありを以て大持と稱ふに御前の事執持て仕奉  
尸とあり是を以て大持と稱ふに御前の事執持て仕奉  
ぬらむと思ひまよ意美を大主の約れるよて奴斯を迹

○古史傳八

○卒



約めれば言ひて三々大ニ又部と云ふ口云ま  
よの通例も有り言ひて世も人を御主と云ひ御身と  
いふの同例も有り言ひて臣使主と書るも由有けり  
然れど此も大社に仕奉る大主の意は稱号あり  
種思ひとけしを皆さる言ひて中臣の中執持  
主と書第六十段中臣連の処に注べし臣使  
師説も何ま久邇能美夜都古と訓はし其由をま  
代に諸仕奉人等を總舉るは臣連伴造國造と並云  
書紀卷多し數ま多敏達卷臣連二造とも有て二造者  
國造伴造也と注せし扱その國造を諸國ふて其國の上  
とて各其國を治る人を云戸あり今云此こと成務天  
皇卷五年の処に見

えとれれ其処に伴造の伴を二枝部あどの部あ  
委く云を見べし凡て某部と云氏くみあ其部ある氏く  
禮の約に言れるを米通ハして言れら牙依言れ  
上達部と書てかムタチ故造の尸は多くを某部と云  
姓ふ多し天武紀十二年九月此処を見べし○今云あ  
其外の尸を負るも多うゆ其を上見えと云首連あど  
比部土師部額田部あどの諸氏此連あるを思へし  
其部と云義あまバあ也然るを或人此伴造と云を引連  
御臣と云義あまバあ也然るを或人此伴造と云を引連  
祿て姓と云義あまバあ也然るを或人此伴造と云を引連  
て言る説を非也部と云怒其意れる姓あ也今云部と云  
造工造佐伯造酒人造衣縫造あどの類部かまば造  
とハ云祿と部ある氏ぞと云ふ意あり  
諸部ふて上として各其部を掌る人を云戸あり垂仁紀  
某部



某部と云をあげて并十箇品部とありまとい欽明紀も秦人戸數拾七千五十三戸以大藏椽為秦伴造とあるおれ聚漢部定其伴造者云くこれ漢部を掌る人其伴造と云ありまとい雄略紀も詔と云ありまとい孝徳紀も詔曰若憂訴之人有伴造者其伴造先勘當而奏こまも其部く字掌る人を其伴造と云りけまは二の造同じ意ふて郡領をも許本理乃美夜都許も懇み記されとゆ此も字を異おれども同言同意あり○今云成務天皇卷五年九月の処み定賜大圍小圍之圍造と見えと依圍造本紀と合せて思ふお大圍を後子圍を建られぬる圍くと對ふを云ひ小圍と後子郡と云むゆの地を云て某くお造字定賜へる由おまむ郡領を許本理能美夜都古と訓こといせと當れり姓氏録み奄智造茨木造山田造眞野造小橋造のとぐひ四十二氏むり地名ある造戸のゐるをみお小圍之造と云るとぐひもて名義ハ御臣あり稱徳紀詔是等も総てを圍造と云へし名義ハ御臣あり稱徳紀詔ふ貞久淨伎心乎以天朝廷乃御奴止奉仕之米天云くま

と丈部姉女乎波内都奴止為冠位舉給比おどあるを以て夜都古を臣の意あるとを知れし推古紀おは圍造をクニノヤツコも訓也夜都古といやむ甚賤き者非或君も對へて臣を云各あり故君臣の意ある臣をむ書紀おどおも皆ヤツコと訓也又と此もりのをもの御奴おぞ云もこれあり但し此も名の本お意ハ一はお免まども造を天皇み對子て臣此意ある故も其部此上さる人を云御奴とハ下お付者を云お用ふけまは依処子至てを甚く異あり思ひ混ふけらばけまは天皇の御臣として推古紀も圍司圍造云其圍くを治る人を圍御臣と云各其部くを掌依人を伴御臣とは云あ也とあ也是もて圍造伴造の事を解とゆけらて美夜都古と云言の本を御屋之子ふて屋之子之を都と云とは



君の屋ミヤに親シヤく侍サマシ仕シふる子コと云イハ義トクふて。世ヨも家ウチ子コ君キミを  
親シヤ此コノ意イお取トルて。臣シヤをシひろく言イハ子コるコトあリ也ナ。或シ説トク不レ夜ヨ都ト古コの  
古コ附ツキ予カ此コノ意イお取トルて。君キミは附ツキる子コの義トクれり。附ツキを都トのミ云イハ  
るコトを体タマ言イハありとて。國クニ造ツクる子コの義トクれり。附ツキを都トのミ云イハ  
るコトを訓ツケて師シのクニ却シりて。非ヒ説トクあり。此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
しコトを非ヒと云イハまシど。却シりて。非ヒ説トクあり。此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
もク國クニ之ノ子コの意イとせシむコト妨サマあリ予カ前マおシ此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
訓ツケふ依ヨて。國クニ造ツクる子コの意イとせシむコト妨サマあリ予カ前マおシ此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
古コと訓ツケべし。其コノ久ク子コ都ト古コと訓ツケみ。伴トモ造ツクる子コの意イとせシむコト妨サマあリ予カ前マおシ此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
大オホ御ミコト許ヨふ在アて。親シヤく仕シ奉ホウまシる宮ミヤ之ノ子コと訓ツケみ。伴トモ造ツクる子コの意イとせシむコト妨サマあリ予カ前マおシ此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
云イハらレむと。思オモへシ大オホ御ミコト許ヨふ在アて。親シヤく仕シ奉ホウまシる宮ミヤ之ノ子コと訓ツケみ。伴トモ造ツクる子コの意イとせシむコト妨サマあリ予カ前マおシ此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
云イハらレむと。思オモへシ大オホ御ミコト許ヨふ在アて。親シヤく仕シ奉ホウまシる宮ミヤ之ノ子コと訓ツケみ。伴トモ造ツクる子コの意イとせシむコト妨サマあリ予カ前マおシ此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
能ノ賣ウてシふコトの有アりて。大オホ殿テン祭サマの詞コト別ワ文フまシと。姓シヤ氏ウヂ録ロクの古コ

語拾遺コトノボシ。今イマ世ヨ内ウチ侍サマシ。善トク言コト美ミ詞コト和ニ君キミ臣シヤ間マ。令シ宸チン襟キン悅エツ懌シ也ナと  
何ナニと。古コは男オトコを廣ヒロクく云イハふコトを合アせて按オシふ。美ミ夜ヨ都ト  
古コ。美ミ夜ヨ能ノ賣ウと對シする稱ナヅケふて。即シテ宮ミヤ之ノ子コ宮ミヤ共トモ大オホ宮ミヤ内ウチふ  
侍サマシ仕シ了シて。天アメノ皇ミコト少シ人ヒト草クサとの中ナカに立タて。事コトを掌サマシる故ユに。男オトコを  
宮ミヤ之ノ子コ女メを宮ミヤ之ノ女メと云イハるとり轉クワじて。美ミ夜ヨ都ト古コと云イハ稱ナヅケ  
の廣ヒロクくありて。君キミお對シへて。臣シヤを云イハ名ナとハ爲ナれるコトあらむ。  
此コノも前マに。姓シヤ氏ウヂ録ロクの神カミ宮ミヤ部ベ造ツクの故ユ事コトに思オモひ合アせて。凡ソト  
て美ミ夜ヨ都ト古コと云イハ言イハふ。出デ雲クモ國クニ造ツクる子コの義トクれり。附ツキを都トのミ云イハ  
出デる名ナと云イハる。津ツ國クニ神カミ別ワ子コの義トクれり。附ツキを都トのミ云イハ  
夜ヨ都ト古コと云イハる。津ツ國クニ神カミ別ワ子コの義トクれり。附ツキを都トのミ云イハ  
まシと。巫ヒコ多タ加カ牟ム能ノ古コと云イハる。津ツ國クニ神カミ別ワ子コの義トクれり。附ツキを都トのミ云イハ  
諸シヨ國クニの國クニ造ツクる子コの義トクれり。附ツキを都トのミ云イハ  
らレむと。思オモへシ大オホ御ミコト許ヨふ在アて。親シヤく仕シ奉ホウまシる宮ミヤ之ノ子コと訓ツケみ。伴トモ造ツクる子コの意イとせシむコト妨サマあリ予カ前マおシ此コノ書シヤ紀キのミ稀ヒと訓ツケれ  
ふコトを考カウへシるコト宜ヨクき。師シ云イハまシと。宮ミヤ奴ヌを美ミ夜ヨ



都古と云ハ別あり其もと私家の奴婢を云ありされどその私家ハ奴婢も君臣ハ臣ハ意をまば云もてけぞ本をちて造字を書く所由也師を未思得定と言おく一ありちて造字を書く所由也師を未思得定と言おく大圀主神を圀造大名牟遲神或を圀作ともうけり也も稱して此は圀造正坐るとしの稱名あるを思ふ子。圀の上カミせしてその圀くを領シとらむよを狭圀を廣く峻圀を平ラらく損シをれし所を修理堅カ久あどもまばなれむ彼圀造云くの御名此例ナカラ不準へて。圀御臣ふあてて。圀造の字ハ書とるを始メりて伴美夜都古の美夜都古も唱ナ此同きはくふやがて此字を書ふら牙るあゆばし。彼漢圀の大良造まよ新羅圀此造位あども依れるよをちて師説よ。圀造を。上代ふを職ツカサふて。即加婆有べうらば

禰あ正し残や。後ふを。加婆禰ハ別ニ有て。其氏の中ふ圀造あり。那良のころみ至て其氏人の中みて。圀造を任し給ふが常れり然るも其圀造と云姓を賜ひしことも。続紀世三此二葉あども見えたり。また大室二年ふを諸圀く造の氏を定めて。圀造紀み載られし事も同書み見え。また陸奥圀み大圀造。圀造ちて。圀く小宰と並べ任せられし事も同ハ八卷み見也。ちて。圀く小宰を置れて後。古圀造を世傳へて其圀字治めたり。漢圀の古此封建の制と云も此子似あり然るも孝徳天皇此御世より彼圀此郡縣の制と云をまほびて京をゆ圀司をかむる。圀く遣て。圀くを治めしめ給ふことふ為まり。其をり前ふも宰と云者有おまども毎圀み必定ちて置れとるを彼御代と正あり。○今云圀之宰の事ハ。顯宗天皇卷二。圀造を圀司ミヨトモチの下ふ立て。多くは年此処ふ委く注べし。圀造を圀司ミヨトモチの下ふ立て。多くは郡領あども任せ正。ちて漸くふ衰もあて。後世みは遂ふ圀くの圀造絶て。今世まで其名の残れるを。出雲さてを



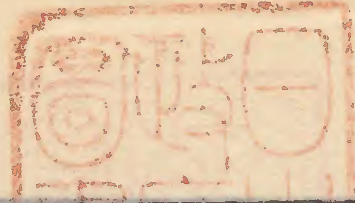
紀国おど此みあり。今云、古の二国、の国造のみ残れ、ちて大抵諸の姓、此中ふ、臣と連やハ。京北、何とゆ、み住居て。殊  
み親く朝廷、み仕奉る氏、此尸外也。雄略卷遺詔、臣連  
郡司、隨時、朝集、と、何、依、も、臣、連、伴造、毎、日、朝、参、国司  
りて。京北、あ、多、ふ在、も、有、は、し、と、言、れ、とる、ぐ、如、く、み、て。  
ま、と、国造、縣、主、稻、置、お、ど、は、皆、国、く、ふ、在、て、其、處、く、を、治む  
依、氏、人、の、職、號、、此、尸、と、爲、れ、る、あ、り。臣、連、国、造、伴、造、と、云、べ、  
ゑ、ぐ、ひ、を、む、、国、造、中、、み、こ、め、と、さ、て、然、、国、く、ふ、在、て、其、趣、も  
る、べ、し、、師、も、既、く、然、、云、れ、き、、事、状、を、見、通、、り、、色、く、ふ、分、れ、と  
る。其、高、下、差、別、は、、師、を、今、、古、と、く、、委、曲、み、、大、抵、見、え  
辨、へ、の、と、し、、せ、、云、、を、、お、れ、ど、

て。国造、縣、主、稻、置、と、順、次、、は、く、所、思、と、、其、由、を、、成、務、天、皇、  
紀四年、大、詔、ふ、、国、郡、立、、長、、縣、、邑、置、首、と、何、る、也、、五、年、九、月、の、處  
ふ、今、、諸、、国、立、造、、長、、縣、、邑、置、稻、置、を、、あ、、依、、成、合、せ、て、考、る、よ、、五、  
年、の、處、乃、、文、、よ、、諸、、国、立、造、、長、と、何、る、を、、四、年、大、詔、此、、国、郡、立、  
長、と、、何、る、を、、受、、と、、ま、む、此、、を、、古、事、記、、の、、同、、天、皇、の、、段、、ふ、、定、、賜、、大、、国、、小、  
国、之、、国、造、と、、あ、る、よ、、當、、て、、国、と、は、、古、事、記、、の、、所、謂、大、、国、を  
云、ひ、、郡、、を、、古、事、記、、の、、所、謂、小、、国、、ふ、、何、と、ゆ、て、国、造、を、、定、、賜、  
へ、る、、あ、、依、、こ、と、著、、く、、縣、、邑、置、稻、置、と、、あ、る、を、、四、年、大、詔、ふ、、縣、  
邑置、首、と、何、る、を、、承、、と、、れ、、此、、を、、古、事、記、、の、、定、、賜、、大、、縣、、小、、縣、  
之、縣、主、を、、云、、ふ、、當、、ゆ、て、縣、と、は、、古、事、記、、の、、所、謂、大、、縣、を、云、、邑









○ 德行式 <small>石指</small> 一幅	○ 立言文 <small>同</small> 一幅	○ 鬼神新論 一卷
○ 出定笑語 <small>講本附錄</small> 二卷	○ 悟道辨 <small>同</small> 二卷	○ 伊吹於呂志 <small>同</small> 二卷
○ 俗神道辨 <small>同</small> 四卷	○ 撞木隨 卷	○ 木匠祖神号 <small>石指</small> 一幅
○ 赤縣歷代尺圖 一枚	○ 石指類 數種	
○ 春秋命歷序考 二卷	○ 武道祖神号 <small>同</small> 一幅	○ 鑿祖神号 <small>同</small> 一幅
○ 宮比神御傳記 一卷	○ 天滿宮御傳記略 二卷	○ 日女島考 一卷
○ 古學二千文 一卷	○ 草木撰種錄 一枚	○ 可古略 一卷
○ 神德畧迹頌 <small>神</small> 卷	○ 古道訓蒙頌 <small>古</small> 卷	

先生の著書凡く白部卷數千卷に迫り右全書目々於其書尊の大意を別  
 小記せる著述書目集を見し知多と門人牛田國秀河内感行等記

○ 先生の著書凡く白部卷數千卷に迫り右全書目々於其書尊の大意を別  
 小記せる著述書目集を見し知多と門人牛田國秀河内感行等記

